

夢他

萩原朔太郎



目次

夢	4
ウォーソン夫人の黒猫	13
猫町	27
秋と漫歩	47
易者の哲理	52
散文詩・詩的散文	56
初めてドストイェフスキイを読んだ頃	135
家庭の痛恨	141

夢

夢と人生 夢が虚妄に思はれるのは、個々の事件が斷片であり、記憶の連続がないからである。昨日私は、夢の中で借金し、夢の中で怪我をした。しかし朝になつて見れば、借金を返す義務もなく、負傷の跡方さへもないのである。そして今夜の夢は、それと全く別なことを經驗する。だがもしさうでなく、夢が夜毎に連続したらどうであらうか。昨日の夢で怪我をした私は、今夜の夢で病院へ入院し、醫師の治療を受けねばならぬ。そして昨日の夢で借りた金を、今夜の夢で催促され、工面しなければならぬのである。

この場合にあつて、夢はまさしく現實である。即ち人々は、晝間の生活と、睡眠中の生活と、二部の併存した人生を生きねばならぬ。神がもし慈悲深く、衆生の間對して平等だつたら、おそらくこの二つの生活は、互に反對のものになるであらう。即ち晝間の生活で幸福であり、樂しく満悦してゐるところの人々は、夢の中で苦惱多く、不幸な人生を經驗し、その反對の人々は、晝間の生活の代償として、夢の中で幸福な世を送る。そしてすべての人々は、神の公平な攝理の下に、エコヒイキなく平等になる。だがどんな場合にあつても、神は決して公平でない。なぜなら夢は、その人の先天的氣質や體質や、特に健康状態によつて決定されるからである。たとへば神經質の人や、内氣で非社交的な人々や、不健康で病弱の人々や、即ち一口で言へば、生存競争の劣敗者たる素質を持った人々は、概して皆苦しい夢、恐ろ

しい夢、人から苛められるやうな夢ばかり見る。反對に樂天的で陽氣な人々や、社交的で元氣がよく、健康のすぐれた強壯の人々や、即ち素質的に生存競争の優勝者たる人々は、概して皆楽しい夢、明るい輝いた夢ばかり見る。「富める者は、その持たざる物をも與へられ、貧しき者は、その持つ物をも奪はる」と耶蘇が言つた聖書の言葉は、人生のどんな場合にも眞實である。幸運の星の下に生れた人は、夜の夢の中でも幸福であり、悪しき星の下に生れた人は、夢の中でさへも、二重にまた不幸である。夢がその一夜限りの斷片であり、記憶の連續をもたないこと、その故にまた虚妄であるといふことは、せめてもの恩寵として、神に感謝すべきことであるかも知れない。

夢を支配する自由 阿片やモルヒネの麻醉が、人を樂しく恍惚とさせるのは、それが半醒半夢の状態を喚起させ、夢を自由に幻想することができからである。眞に深く眠つてしまへば、人はもはや意識を失ひ、或る超自我の生命支配者がするところの、勝手な法則に夢を委ねなければならなくなる。しかもその夢は、たいいて願はしくないこと、思ひがけないこと、厭な樂しくもないことばかりである。しかも覺醒している間は、意識が現實の刺激に對して、一々の決定された法則によつて反應するため、一も眞の自由が得られず、人間の精神生活そのものが、物理的法則の

支配下に屬してしまふ。精神の眞の自由——自分の意志によつて、自分の意識を支配することの自由——は、ただ夢と現實の境、半醒半夢の状態にだけある。阿片の酔夢の中では、人はその心に畫いてあるところの、どんなヴィジョンをも幻想し得る。だがさうした毒物の麻醉を借りずに、もつと自然的な仕方によつて、夢を自由にコントロールすることができれば、人生はずつと幸福なものに變るであらう。その時人々は、現實に充たされない多くの欲望を、夢で自由に充たすことができる上に、意識をその決定する因果の法則から、自由に解放することによつて、あらゆる放縱不羈なイメージや美的意匠を、夢で藝術することができるのである。

夢と情緒 夢の中で見る事件や物象は、概して皆灰色に薄ぼんやりして、現實のやうにレアルでない。だがその反對に、夢の中で感ずる情緒は、現實のそれと比較にならないほど、ひどく生々としてレアリスチックに強烈である。特に悪夢などで經驗する、恐怖の情緒の物凄さは、到底普通の言葉で語られないほど、生々として血まみれに深刻である。(多くの物凄い怪談は、たいてい夢の恐怖を素材にしてゐる) 現實の世界に於ては、たとへどんなに恐ろしい事件、死に直面するやうな事件に遭遇しても、決して夢のそれのやうには恐ろしくない。悲哀の情緒もまた、夢の中では特別に辛烈である。夢で愛人と別れたり、両親と死別したり、それから特に、自

分の避けがたい死や不運やを見たりする時ほど、眞に斷腸の悲しみといふ言葉を、文字通りに感じて歎歎することはない。夢で慈母を喪つた悲しみは、むしろ現實のそれに數倍して哀切である。現實の情緒は、悲哀にまれ、恐怖にまれ、理智の常識する白晝まひるの太陽に照らされて、夢の闇の中で見るやうに強烈でなく、晝間の残月のやうにぼんやりしてゐる。情緒の眞のレアリティは、夢の中へのみ實在してゐる。そしてこのことは、夢が何億萬年の古い人類の歴史を、我々の記憶の中に再現することを實證する。おそらく我々は、原始に類人猿の一族から發生した時、未だ理智の悟性が芽生えなかつた。その時人間は、鳥類や獸類と同じやうに、純粹に情緒ばかりで行動して居た。そして鳥類や獸類やは、今でも尚依然として、我々が夢の中で感ずるやうに、世界を「現實レアル」に經驗して居るのである。

夢と動物愛 動物の情緒（悲哀や、喜悅や、恐怖やの感情）が、いかに生々なまなましく強烈なものだといふことを、夢の經驗によつて推測するところの人々は、彼等の畜類に對して、自然に同情と理解をもつようになり、基督教的の倫理觀から、動物愛護主義者になる。

夢の起源 夢が性慾の潜在意識だといふフロイドの説は、そのドグマによる彼の

夢判斷と共に、私の考へるところでは誤つて居る。おそらく夢の起源は、人間にも動物にも共通して、祖先の古い生活経験を遺傳してゐるところの、先驗的記憶の再現である。夜、夢の中で遠吠えする犬の聲が、それ自ら狼の鳴聲と同じであるといふことは、疑ひもなく犬の夢が、祖先の狼であつた時の、古い記憶を表象してゐるのである。人間の夢の中に、蛇や蜥蜴やの爬蟲類が、最も普通にしばしば現はれるのは、フロイドの言ふ如く性慾の表象でなく、おそらく人類の發生期に於て、それらの巨怪な爬蟲類が地球上に繁盛し、憐れな頼りない弱者であつた我等の先祖を、絶えず脅かしてゐた爲であらう。人類の先祖は、一億萬年もの長い間、非力な頼りない動物として、酷烈な自然と闘ひながら、不斷に他の強大な動物から脅かされ、生命の危険におびえわなないて居た。人間がその發育した理智によつて、自然の苛虐から自衛を講じ、次第に他の強敵を征服して、自らの文化と歴史とを作つたのは、極めて最近の事蹟であり、人類進化の悠遠な史上に於ては、殆んど言ふに足らない短日月の歴史にすぎない。我等の意識内容にある記憶の主座は、過去に最もながく人類の経験した、様々の恐ろしいこと、氣味の悪いこと、怯え戦つてることばかりである。人は夜の夢の中で、樹人や火人であつた頃の、先祖の古い記憶を再現し、いつも我等の生命を脅かして居たところの、妖怪變化の恐ろしい姿や、得體の解らぬ怪獸やの、魑魅魍魎ちみもろうりょうの大群に取り圍まれて魘おそされてゐる。人が本能的に闇黒を恐

れるのも、それが敵から襲撃されるところの、最も恐ろしく氣味の悪い時であつたからだ。夢の中では、人間も萬物の靈長ではなく、馬や牛や動物と變りがない。或はもつとそれよりも、悲しく頼りない生物であるかも知れない。人間の夢の中に理智が現はれ、文化人としての記憶が表象されるのは、おそらく數千萬年の將來に屬するだらう。

心理學者の誤謬　夢の解釋について、多くの心理學者に共通する誤謬は、覺醒時に於ける半醒半夢の状態から、眞の昏睡時の夢を類推することである。夢が性慾の潜在意識であるといふフロイドの學説も、おそらくその同じ誤謬から出發してゐる。覺醒時に於ては、既に半ば意識が働き、夢を夢と意識することから、人は或る程度まで、夢を自分の意志によつて、自由にコントロールすることができるのである。そこでフロイドの説の如く、人はその日常生活で抑壓され、ふだんに内攻してゐる性の欲求を、おのづから夢の中に變貌して表象する。多くの人々にあつて「まだ醒めやらぬ明方の夢」が楽しいのは、つまり言つてこの事實を説明してゐる。なぜならフロイドの説によれば、夢は原則として「楽しいもの」であり、性の解放による饗宴でなければならぬからだ。だが眞の昏睡時の夢は、概してあまり楽しいものではなく、むしろ性の解放とは關係がないところの、恐ろしいことや悲しいことが

多いのである。

ベルグソンの夢の説も、ひとしくまた同じ點で誤つてゐる。ベルグソンによれば、夢は身體の内外に於ける知覺の刺激——戸外の物音や、胃腸の重壓感や——によつて動因的に表象されるといふのである。彼はその例證として、戸外で吠える犬の聲から、大砲の音を表象し、それによつて戦争の夢を見たと言つてゐる。覺醒時に於て、知覺が半ば目を醒ましてゐる時には、疑ひもなくその通りである。しかし意識が全く昏睡してゐる夢の中では、ベルグソンの説明が意味をなさない。おそらく夢の解説は、もつと不思議で解きがたく、謎の深い神祕の闇に低迷してゐる。

幼兒の夢 幼兒は絶えず夜泣きをし、何かの夢に魘されておびえ泣いてゐる。母の胎體マタを出たばかりの小さな肉塊。人間といふよりは、むしろ生命の神祕な原形質といふべき彼等は、夢の中に何物の表象を見るのであらうか。性慾の芽生えもなく、人生に就いて何の經驗もない彼等は、おそらくその夢の中で、過去に何萬代の先祖から遺傳されたところの、人類の純粹記憶を表象してゐるのであらう。夢に魘えて夜泣きをする幼兒の聲ほど、生命の或る神祕的な恐怖と戦慄とを、哀切に氣味わるく感じさせるものはない。たしかに彼等の幼兒は、夢の中で魍魎ワウリョウ魍魎ワウリョウに取り圍まれ、人類の遠い先祖が經驗した、言説しがたく恐ろしいこと、危険なことを體驗し、生

命の脅かされたスリルを味はつてゐるのである。夢を性慾の表象とし、それによつて夢判断をするフロイド流の心理學者は、すくなくともその同じ原理によつて、赤兒の夢を判断し得ない。夢の起源は、彼等の學者が思惟するよりは、もつとミステリアスな詩人の表象と關聯してゐる。

ウ
オ
ー
ソ
ン
夫
人
の
黒
猫

ウォーソン夫人は頭脳もよく、相当に教育もある婦人であった。それで博士の良人が死んで以来、或る學術研究会の調査部に入り、図書の整理係として働らいていた。彼女は毎朝九時に出勤し、午後の四時に帰宅していた。多くの知識婦人に見る範疇として、彼女の容姿は瘠形で背が高く、少し黄色味のある皮膚をもった神経質の女であった。しかし別に健康には異状がなく、いつも明徹した理性で事務を整理し、晴れやかな精神で、きばきと働らいていた。要するに彼女は、こうした職業における典型的の婦人であった。

或る朝彼女は、いつも通りの時間に出勤して、いつも通りの事務を取っていた。一通り仕事が終わった後で、彼女はすつかり、疲労を感じていた。事務室の時計を見ると、丁度四時五分を指しているのです。彼女は卓上の書類を片づけ、そろそろ帰宅する準備を始めた。彼女は独身になってから、或る裏町の寂しい通りで、一間しかない部屋を借りていたので、余裕もなく装飾もない、ほんとに味気ない生活だった。いつでも彼女は、午後の帰宅の時間になると、その空漠とした部屋を考え、毎日毎日同じ位地に、変化もなく彼女の帰りを待つてる寝台や、窓の側に極りきつてる古い書卓や、その上に載つてる退屈なインキ壺などを考え、言いようもなく味気なくなり、人生を憂鬱なものに感ずるのだった。

この日もまた、そのいつも通りの帰宅の時間に、いつも通りの空虚な感情が襲つ

て来た。だがそうした気分の中に、どこか或る一つの点で、いつもとちがった不思議の予感が、悪寒おかんのようにぞくぞくと感じられた。彼女の心に浮んだものは、いつものような退屈な部屋ではなく、それよりもつと悪い、厭いややかな陰鬱なものが隠れている、不快な気味のわるい部屋であった。その圧迫する厭いややかな気分は、どんなにしても自分の家に、彼女を帰らせまいとするほどだった。けれども結局、彼女は重たい外套がいたうを着て、いつも通りの家路いえじをたどって行った。

部屋の戸口に立った時、彼女は何物かが室の中に、明らかにいることを直感した。いつ、どこから、だれがこの部屋に這入はいって来て、自分の留守にしているのだろう。そうした想像の謎の中で、得体えたいのわからぬ一つの予感が、疑いを入れない確実さで、益々ますますはつきりと感じられた。「確かに。何物かがいる。いるに相違ない。」彼女はためらった。そして勇気を起し、一息に扉ドアを開けひらいた。

部屋の中には、しかし一人の人間の姿もなかった。室内はひつそりとしており、いつものように片づけられていた。どこにも全く、少しの変ったこともなかった。けれどもただ一つ、部屋の真中の床の上へ、見知らぬ黒猫が坐り込んでいた。その黒猫は大きな瞳ひとみをして、じつと夫人をみつめていた。置物のように動かないで、永遠に静かな姿勢をしてうずくまっていた。

夫人は猫を飼っておかなかった。もちろんその黒猫は、彼女のいない留守の間に、

他所よそから紛れ込んだものに相違なかつた。がどこから這入つて来たのだろう。留守の間の用心として、いつも扉ドアは嚴重とくきに閉してあつた。もちろん鍵かぎをかけ、そしてすべての窓は錠おろを下して密閉されていた。夫人は少し疑い深く、部屋かみのあらゆる隅々を調べてみた。しかしどこにも決して、猫の這入るべき隙間すきまはなかつた。その部屋には煙突もなかつたし、空気ぬきの穴もなかつた。どんなによく調べてみても、猫の這入り得る箇所はないのである。

夫人はそこで考えた。留守の間に何人かが——おそらくは窃盗せつとうの目的で——一度この部屋をうかがい、窓の一部を開けたのである。猫はその時偶然にどこからか這入つて来た。そしてその人物しほが、暫らくこの部屋で何事かをした後に、再度またもとのように、窓を閉めて歸つて行つた。猫はその時から、此所に閉じこめられているのである。実際また、それより外に推理の仕方はなかつたのだ。

夫人は決して、病的な精神の所有者ではなかつた。反対に理智の発達した、推理癖のある女性であつた。けれども婦人の身として、さすがにこの不思議な出来事は不気味であつた。自分のいない留守の間に、或る知らない人物が忍び込んで、居間いまで何事かをしているということは、考えるだけでも神経を暗くした。

夫人は夢に魘うなされた時のように、厭いとやな重圧した気分を感じた。だが彼女の推理癖は、どうにもしてこの奇怪な事件から、真の原因を探り出そうと考えた。もし或

る人物が、留守にどこかの窓を開けて、そこから闖入して来るとすれば、窓の或るどこかに、コジあけた痕跡こんじきが残っているか、でないとしても、多少の指紋が残っているべきはずである。夫人は注意ぶかく調べて見た。だが窓のどこにも、少しの異状がなく、指紋らしきものさえなかった。この点の様子からは、絶対に人の這入った痕跡がないのである。

翌朝起きた時に、彼女は一つの妙案を思いついた。それは部屋のあらゆる隅々へ、人の氣づかない色チヨークの粉を、一面に薄く敷いておくことである。もし今日も昨日のように、留守に何事かが、起つたらば、すっかり証拠の足跡がついてしまう。例の厭やな猫でさえも、それが這入つて来た箇所からの、正直な足跡を免かれない。一切の原因が明白になつてしまふだろう。

この計案を完全に実行し、充分の成功を確めたところで、彼女はいつもの外套を着、いくらか落付いた気分で行った。が、だが事務室の柱時計が四時に近くなつた時には、またいつもの不安な予感が、いつものように襲つて来た。どうしても部屋の中に、だれかが坐っているような感じがする。その感じはハッキリしており、眼の前を飛ぶ小虫のように、執拗しつとに追いのけられないものであった。そしてなお不吉なことには、いつも必ず適中するのであった。果してその留守の部屋の中には、今日もまた黒猫が坐り込んでた。気味の悪い静かな瞳で、じつと夫人の方を

みつめながら。しかもその部屋の中には、夫人のすべての期待に反して、どこに一つ小さな足跡すら付いてなかった。今日の朝に敷かれたチョコクの粉は、閉じ込められた室へやの重たい空気で、黴かびのように積っていた。その粉の一粒すらが、少しも位地を換えてなかった。明白に部屋の中へは、何物も這入って来なかったのである。

すべてのあり得べき奇異の事情と、その臆測おそそくされる推理の後で、夫人はすっかり混惑こんわくしてしまった。実証されてる事実として、此所にはどんな人間も這入って来ず、猫でさえも、決して外部から入り込んだものではないのだ。しかも奇怪のことには、その足跡を残さぬ猫が、ちゃんと目の前の床に坐り込んでいるではないか。今、此所に猫がいるというほど、それほど確かな事実はない。しかも魔法の奇蹟でない限り、この固く閉めこんだ室の中に、一つの足跡も残さずして、猫がいるという道理はないのである。

夫人は理性を投げ出してしまった。それでもなお、もつと念入りの注意の下に、翌日もまた同じ試験を試みてみた。だが結果は、依然として同じであり、しかもその翌日も、翌日も同じ気味の悪い黒猫が、同じ床の上に坐り込んでいた。そしてこの奇怪の動物は、彼女が窓を開けると同時に、いつもそこから影のように飛び去って行った。

とうとう夫人は、最後に或る計画を思いついた。猫がどこから這入ってくるのか

を見定めるため、扉ドの蔭にかくれていて、終日鍵穴から覗のぞいてみようと考えた。翌日、彼女は出勤を休んだ。そしていつもの通り、窓にすっかり錠をおろし、戸口に一脚の椅子を持ち出した。それから扉を閉め、椅子を鍵穴のところを持って行って、一秒の間も油断なく、室内を熱心に覗のぞいていた。朝から午後まで長い時間が経過した。それは彼女の緊張した注意力には、ひどく苦しい時間であり、耐えられないほどの長い時間であった。ともすれば彼女は、注意力の弛しかん緩からして、他のことを考えてぼんやりしていた。彼女は時々、胸の隠衣かくしから時計を出して針の動くのを眺めていた。すべて長い時間の間、室内には何事も起らなかった。夫人はまた時計を出した。その時丁度、針が四時五分前を指していたので、うたた寝から醒めた人のように、彼女は急に緊張した。そして再度鍵穴から覗のぞいた時、そこにはもはや、ちゃんといつも黒猫が坐っていた。しかもいつもと同じ位地に、同じ身動きもしない静かな姿勢で。

全くこの事實は、超自然の不思議というより外、解決のできないことになってしまった。ただ一つだけ解つてるのは、午後の四時になる少し前に、どこからか、どうしてか解らないが、とにかく一疋いっぴきの大きな黒猫が、室内に現われてくるという事實であった。夫人はもはや、自分の認識を信用しなくなってしまう。すべてやるだけの手段を尽し、疑い得るだけの実験を尽してしまった。夫人はもしかすると、自

分の神経に異状があり、狂気しているのではないかと思つた。彼女は鏡の前に立つて、瞳孔が開いているかどうかを見ようとした。

毎日毎日、その忌わしい奇怪の事実が、執拗にウオーソン夫人を苦しめた。彼女はすっかりヒステリカルになつてしまい、白昼事務室の卓の上にも、猫の幻影を見るようになってしまった。時としてはまた、往來を歩くすべての人が、猫の変貌した人間のように見えたりした。そういう時に彼女は、その紳士めかした化猫の尻尾をつかんで、街路に叩きつけてやりたいという、狂気めいた憎悪の激情に駆り立てられ、どうしても押えることができなかった。

それでも遂に、理性がまた彼女に回復して來た。この不思議な事件について、第三者の実証を確めるために、友人を招待しようと考えたのだ。それで三人の友人が、いつも猫の現われる時間の少し前に、彼女の部屋に招待された。二人は同じ職業の婦人であり、一人は死んだ良人の親友で、彼女とも家族的に親しくしていたところの、相当年輩に達した老哲学者であつた。

訪客と主人を加えて、丁度四脚の肱掛椅子が、部屋の中央に円く並べられた。それは客のだれの眼にも、猫がよく見える位置を選んで、彼女がわざとそうしたのであつた。始め暫らくの間、皆は静かに黙つていた。しかし少時の後には、会話が非常にはずんで來て、皆が快活にしゃべり始めた。いろいろな取りとめもない雑談から、

話題は心霊学のことに移った。老博士の哲学者は、この方面に深い興味を持つたので、最近或る心霊学会で報告された、馬鹿に陽気な幽霊の話をして婦人たちを面白可笑しく笑わせた。しかしウォーソン夫人だけは、真面目になつて質問した。

「動物にも幽霊があるでしょうか？ 例えば猫の幽霊など。」

皆は一緒に笑い出した。猫の幽霊という言葉がひどく滑稽に思われたのである。だが丁度、その時皆の坐っている椅子の前へ、いつもの黒猫が現われて来た。それはだれも知らないどこかの窓から、そっと入り込んで来たのであった。そして平気な様子をして、いつもの場所にすまじ込んで坐っていた。

「この事実は何ですか？」

夫人は神経を緊張させて、床の上の猫を指さした。その一つの動物に、皆の注意を集中させようとしたのである。

人々はちよつとの間、夫人の指さす所を見た。しかしすぐに眼をそらして、他の別の話を始めた。だれも猫については、少しも注意していないのである。多分皆は、そんなつまらない動物に、興味を持つとうとしないのだろう。そこでまた夫人が言った。

「どこから這入つて来たのでしょうか。窓は閉めてあるし、私は猫なんか飼つてもないのに。」

客たちはまた笑った。何かの突飛とつびな洒落しやれのように、夫人の言葉が聴えたからだ。すぐに人々は、前の話の続きにもどり、元氣よくしやべり出した。

夫人は不愉快な侮辱を感じた。何という礼義知らずの客だろう。皆は明らかに猫を見ている。その上に自分の質問の意味を知ってる。自分は真面目で質問した。それにどうだ。皆は空々しく白ぼつくて、故意に自分を無視している。「どんなにしても」と、夫人は心の中で考えた。「この白ぼつくれた人々の眼を、床の動物の方に引きつけ、そこから他所見よそみが出来ないように、否応なく釘付けくぎづにしてやらねばならない。」

一つの計画された意志からして、彼女は珈琲茶碗コーヒーちやわんを床に落した。そして過失に驚いた様子をしながら、人々の足下に散らばっている破片を集め、丁寧に謝罪しながら、婦人客の裾すそについた液体の汚点しみをぬぐった。それからの行為は、否応なく客たちの眼を床に向け、すぐ彼らの足下にいる猫へ注意を引かねばならないはずだ。にもかかわらず、人々は快活にはしやぎ廻つて、そんなつまらない主人の過失を、意にもかけない様子をした。皆は故意に会話をはずませて、過失に狼狽ろうばいしている主人の様子を、少しも見ないように勉つとめていた。

ウォーソン夫人は耐えがたくいら、いらして来た。彼女は二度目の成功を期待しながら、執念深く同じ行為を繰返して、再度茶匙ちやさじを床に落した。銀製の光った匙は、床

の上で跳ねあがり、鋭く澄んだ響を立てた。がその響すらも、人々の熱中した話題の興味と、婦人たちのほしやいだ話声の中で消されてしまった。だれもそんな事件に注意をせず、見向いてくれる人さえなかった。反対に夫人の方は益々神経質に興奮して来た。彼女はすっかりヒステリックになり、烈しい突発的の行動に駆り立てられる、激情の強い発作を感じて来た。いきなり彼女は立ちあがった。そして足に力を込め、や、け、く、そ、に床を踏み鳴らした。その野蛮な荒々しい響からして、急に室内の空気が振動した。

この突発的なる異常の行為は、さすがに客人たちの注意を惹いた。皆は吃驚して、一度に夫人の方を振り向いた。けれどもただ一瞬時にすぎなかった。そしてまたもとのように、各自の話に熱中してしまった。もうその時には、ウォーソン夫人の顔が真青に変っていた。彼女はもはや、この上客人たちの白々しさと無礼とを、がまんすることが出来なかった。或る発作的な激情が、火のように全身を焼きつけて来た。彼女はその憎々しい奴どもやつの頸を引つつかんで、床にいる猫の鼻先へ、無理にもぐ、い、ぐ、いと押しつけてやろうとする、強い衝動を押えることができなかった。

ウォーソン夫人は椅子を蹴った。そして本能的な憎悪の感情に熱しながら、いきなり一人の婦人客の頸を引つつかんだ。その婦人客の細い頸は、夫人の熱した右手の中で、死にかかった鷺鳥がちょうのようにびく、びく、びく、していた。夫人はそいつを引きずり倒

して、鼻先の皮がむけるまで、床の上へ惨虐さんげつにこすり付けた。

「ご覧なさい！」

夫人は怒鳴った。

「此所に猫がいるんだ。」

それから幾度も繰返して叫んだ。

「これでも見えないか？」

おそろしい絶叫が一時に起った。婦人客は死ぬような悲鳴をあげて、恐怖から壁に張りつき、棒立ちに突っ立っていた床にずり倒れた。婦人の方は殆んど完全に気絶していた。ただ一人、老哲学者の博士だけが、突然的の珍事に対して、手の付けようもなく呆然ぼうぜんと眺めていた。ウォーソン夫人の充血した眼は、じつと床の上の猫を見つめていた。その大きな気味の悪い黒猫は、さつきから久しい間、じつとそこに坐っており、音楽のように静かにしていた。その印象の烙やくきつけられた姿は、おそらく彼女の生涯まで、どんなにしても離れがたく、執拗しつごうに生きてつきまとつていくように思われた。「今こそ！」と彼女は考えた。「こいつを撃ち殺してしまわねばならない！」

それから書卓ひきだしの抽出を開け、象牙ぞうげの柄に青貝の鑄いり込んである、女持ちの小形なピストルを取り出した。そのピストルは少し前に、不吉な猫を殺す手段として、用

意して買った物であったが、今こそ始めて、これを役立てる決行の機会が来たのである。

彼女は曳金ひきがねに手をあてて、じつと床の上の猫を覗うかがった。もし発火されたならば、この久しい時日の間、彼女を苦しめた原因は、煙と共に地上から消失してしまふだけである。彼女はそれを心に感じ、安楽な落付いた気分になった。そして狙ねらいを定め、指で曳金ひきがねを強く引いた。

轟然ごうぜんたる発火と共に、煙が室内いっぱいになり立ちこもった。だが煙の散ってしまった後では、何事の異状もなかったように、最初からの同じ位地に、同じ黒猫が坐っていた。彼は蠅しじみのような黒い瞳めをして、いつものようにじつと夫人を見つめていた。夫人は再度拳銃けんじゆうを取りあげた。そして前よりもつと近く、すぐ猫の頭の上で発砲した。だが煙の散った後では、依然たる猫の姿が、前と同じように坐っていた。その執拗な印象は、夫人を耐えがたく狂気にした。どんなにしても彼女は、この執拗な黒猫を殺してしまい、存在まっさつを抹殺しなければならぬのだ。

「猫が死ぬか自分が死ぬかだ！」

夫人は絶望的になつて考えた。そして憎悪バツションの激情に逆上しながら、自暴自棄になつて拳銃を乱発した。三発！ 四発！ 五発！ 六発！ そして最後の弾たまが尽きた時に、彼女は自分の額ひたいのコメカミから、ぬるぬるとして赤いものが、糸のように引いて

くるのを知った。同時に眼がくらみ、壁が一度に倒れてくるような感じがした。彼女は裂けるように絶叫した。そして火薬の臭いの立ちこめている、煙の濛々とした部屋の中で、燃えついた柱のようには、ったり倒れた。その唇からは血がながれ、蒼ざめた顔の上には、狂気で引き搔かれた髪の毛が乱れていた。(完)

附記。この物語の主題は、ゼームス教授の心理学書に引例された一実話である。

猫町

散文詩風な小説

蠅はえを叩たたきつぶしたところで、
蠅の「物そのもの」は死には
しない。単に蠅の現象をつぶ
したばかりだ。――

シヨウペンハウエル。

1

旅への誘いざないが、次第に私の空想ロマンから消えて行つた。昔はただそれの表象、汽車や、汽船や、見知らぬ他国の町々やを、イメージするだけでも心が躍おどつた。しかるに過去の経験は、旅が単なる「同一空間における同一事物の移動」にすぎないことを教えてくれた。何処どこへ行つて見ても、同じような人間ばかり住んでおり、同じような村や町やで、同じような単調な生活を繰り返している。田舎いなかのどこの小さな町でも、商人は店先で算盤そろばんを弾はきながら、終日白っぽい往来を見て暮しているし、官吏は役所の中で煙草タバコを吸い、昼飯の菜のことなど考えながら、来る日も来る日も同じように、味気ない単調な日を暮しながら、次第に年老いて行く人生を眺ながめている。旅への誘いは、私の疲労した心の影に、とある空地あきちに生はえた青桐あおぎりみたいな、無限の退屈

した風景を映像させ、どこでも同一性の法則が反覆している、人間生活への味気ない嫌厭けんえんを感じさせるばかりになった。私はもはや、どんな旅にも興味とロマンスをなくしてしまった。

久しい以前から、私は私自身の独特な方法による、不思議な旅行ばかりを続けていた。その私の旅行というのは、人が時空と因果の外に飛翔ひしょうし得る唯一の瞬間、即ちあの夢と現実との境界線を巧みに利用し、主観の構成する自由な世界に遊ぶのである。と言ってしまうえば、もはやこの上、私の秘密について多く語る必要はないであろう。ただ私の場合は、用具や設備に面倒な手間がかかり、かつ日本で入手の困難な阿片あへんの代りに、簡単な注射や服用ですむモルヒネ、コカインの類を多く用いたということだけを附記しておこう。そうした麻醉によるエクスタシイの夢の中で、私の旅行した国々のことについては、此所ここに詳しく述べる余裕がない。だがたいいていの場合、私は蛙かえるどもの群がっている沼沢地方や、極地に近く、ペンギン鳥のいる沿海地方などを徘徊ほうかいした。それらの夢の景色の中では、すべての色彩あざが鮮やかな原色をして、海も、空も、硝子ガラスのように透明な真青まっさおだった。醒さめての後にも、私はそのヴィジョンを記憶しており、しばしば現実の世界の中で、異様の錯覚を起したりした。薬物によるこうした旅行は、だが私の健康をひどく害した。私は日々しんじゆすいに憔悴し、血色が悪くなり、皮膚が老衰よとに澱よどんでしまった。私は自分の養生ようじゆうに注意し始めた。そ

して運動のための散歩の途中で、或る日偶然、私の風変りな旅行癖を満足させ得る、一つの新しい方法を発見した。私は医師の指定してくれた注意によつて、毎日家から四、五十町（三十分から一時間位）の附近を散歩していた。その日もやはり何時も通りに、ふだんの散歩区域を歩いていて、私の通る道筋は、いつも同じように決まっていた。だがその日に限つて、ふと知らない横丁を通り抜けた。そしてすっかり道をまちがえ、方角を解らなくしてしまった。元来私は、磁石の方角を直覚する感官機能に、何かの著るしい欠陥をもつた人間である。そのため道のおぼえが悪く、少し慣れない土地へ行くと、すぐ迷児になつてしまった。その上私には、道を歩きながら瞑想に耽る癖があつた。途中で知人に挨拶されても、少しも知らずにいる私は、時々自分の家のすぐ近所で迷児になり、人に道をきいて笑われたりする。かつて私は、長く住んでいた家の廻りを、塀に添うて何十回もぐるぐると廻り歩いたことがあつた。方向觀念の錯誤から、すぐ目の前にある門の入口が、どうしても見つからなかつたのである。家人は私が、まさしく狐に化かされたのだと言つた。狐に化かされるといふ状態は、つまり心理学者のいう三半規管の疾病であるのだらう。なぜなら学者の説によれば、方角を知覚する特殊の機能は、耳の中にある三半規管の作用だと言ふことだから。

余事とはかく、私は道に迷つて困惑しながら、あてすいりよう当推量で見当をつけ、家の方へ

帰ろうとして道を急いだ。そして樹木の多い郊外の屋敷町を、幾度かぐるぐる廻ったあとで、ふと或る賑やかな往来へ出た。それは全く、私の知らない何所かの美しい町であった。街路は清潔に掃除されて、鋪石がしつとりと露に濡れていた。どの商店も小綺麗にさっぱりして、磨いた硝子の飾窓には、様々の珍しい商品が並んでいた。珈琲店の軒には花樹が茂り、町に日蔭のある情趣を添えていた。四つ辻の赤いポストも美しく、煙草屋の店にいる娘さえも、杏のように明るくて可憐であった。かつて私は、こんな情趣の深い町を見たことがなかった。一体こんな町が、東京の何所にあつたのだろう。私は地理を忘れてしまった。しかし時間の計算から、それが私の家の近所であること、徒歩で半時間位しか離れていないいつもの私の散歩区域、もしくはそのすぐ近い範囲にあることだけは、確実に疑いなく解っていた。しかもそんな近いところに、今まで少しも人に知れずに、どうしてこんな町があつたのだろうか？

私は夢を見ているような気がした。それが現実の町ではなくなって、幻燈の幕に映った、影絵の町のように思われた。だがその瞬間に、私の記憶と常識が回復した。気が付いて見れば、それは私のよく知っている、近所の詰らない、ありふれた郊外の町なのである。いつものように、四ツ辻にポストが立って、煙草屋には胃病の娘が坐っている。そして店々の飾窓には、いつもの流行おくれの商品が、埃っぽく欠伸

をして並んでいるし、珈琲店の軒には、田舎らしく造花のアーチが飾られている。何もかも、すべて私が知っている通りの、いつもの退屈な町にすぎない。一瞬間の中に、すっかり印象が変わってしまった。そしてこの魔法のような不思議の変化は、単に私が道に迷って、方位を錯覚したことだけに原因している。いつも町の南はずれにあるポストが、反対の入口である北に見えた。いつもは左側にある街路の町家が、逆に右側の方へ移ってしまった。そしてただこの変化が、すべての町を珍しく新しい物に見せたのだった。

その時私は、未知の錯覚した町の中で、或る商店の看板を眺めていた。その全く同じ看板の絵を、かつて何所かで見たことがあると思った。そして記憶が回復された一瞬時に、すべての方角が逆転した。すぐ今まで、左側にあった往来が右側になり、北に向って歩いた自分が、南に向って歩いていることを発見した。その瞬間、磁石の針がぐるりと廻って、東西南北の空間地位が、すっかり逆に変ってしまった。同時に、すべての宇宙が変化し、現象する町の情趣が、全く別の物になってしまった。つまり前に見た不思議の町は、磁石を反対に裏返した、宇宙の逆空間に実在したのであった。

この偶然の発見から、私は故意に方位を錯覚させて、しばしばこのミステリーの空間を旅行し廻った。特にまたこの旅行は、前に述べたような欠陥によって、私の

目的に都合がよかった。だが普通の健全な方角知覚を持つてゐる人でも、時にはやはり私と同じく、こうした特殊の空間を、経験によつて見たであろう。たとえば諸君は、夜おそく家に帰る汽車に乗つてゐる。始め停車場を出発した時、汽車はレールを真直に、東から西へ向つて走つてゐる。だがしばらくするうちに、諸君はうたた寝の夢から醒める。そして汽車の進行する方角が、いつのまにか反対になり、西から東へと、逆に走つてゐることに気が付いてくる。諸君の理性は、決してそんなはずがないと思う。しかも知覚上の事実として、汽車はたしかに反対に、諸君の目的地から遠ざかつて行く。そうした時、試みに窓から外を眺めて見給え。いつも見慣れた途中の駅や風景やが、すっかり珍しく變つてしまつて、記憶の一片さえも浮ばないほど、全く別のちがつた世界に見えるだろう。だが最後に到着し、いつものプラットホームに降りた時、始めて諸君は夢から醒め、現実の正しい方位を認識する。そして一旦それが解れば、始めに見た異常の景色や事物やは、何でもない平常通りの、見慣れた話らない物に變つてしまふ。つまり一つの同じ景色を、始めに諸君は裏側から見、後には平常の習慣通り、再度正面から見たのである。このように一つの物が、視線の方角を換へることで、二つの別々の面を持つてゐること。同じ一つの現象が、その隠された「秘密の裏側」を持つてゐるといふことほど、メタフィジックの神秘を包んだ問題はない。私は昔子供の時、壁にかけた額の絵を見て、いつも熱心

に考え続けた。いったいこの額の景色の裏側には、どんな世界が秘密に隠されているのだろうか。私は幾度か額をはずし、油絵の裏側を覗いたりした。そしてこの子供の疑問は、大人になった今日でも、長く私の解きがたい謎になつてゐる。

次に語る一つの話も、こうした私の謎に対して、或る解答を暗示する鍵になつてゐる。読者にしてもし、私の不思議な物語からして、事物と現象の背後に隠れてゐるところの、或る第四次元の世界——景色の裏側の実在性——を仮想し得るとせば、この物語の一切は真実である。だが諸君にして、もしそれを仮想し得ないとするならば、私の現実を経験した次の事実も、所詮はモルヒネ中毒に中枢を冒された一詩人の、取りとめもないデカダンスの幻覚にしか過ぎないだろう。とにかく私は、勇気を奮つて書いて見よう。ただ小説家でない私は、脚色や趣向によつて、読者を興がらせる術を知らない。私の為し得ることは、ただ自分の経験した事実だけを、報告の記事に書くだけである。

2

その頃私は、北越地方のKという温泉に滞留していた。九月も末に近く、彼岸を過ぎた山の中では、もうすっかり秋の季節になつていた。都会から来た避暑客は、

既に皆帰つてしまつて、後には少しばかりの湯治客が、静かに病を養っているのであった。秋の日影は次第に深く、旅館の侘しい中庭には、木々の落葉が散らばっていた。私はフランネルの着物を着て、ひとりで裏山などを散歩しながら、所在のない日々の日課をすごしていた。

私のいる温泉地から、少しばかり離れた所に、三つの小さな町があつた、いずれも町というよりは、村というほどの小さな部落であつたけれども、その中の一つは相当に小ぢんまりした田舎町で、一通りの日常品も売っているし、都会風の飲食店なども少しはあつた。温泉地からそれらの町へは、いずれも直通の道路があつて、毎日定期の乗合馬車が往復していた。特にその繁華なU町へは、小さな軽便鉄道が布設されていた。私はしばしばその鉄道で、町へ出かけて行って買物をしたり、時にはまた、女のいる店で酒を飲んだりした。だが私の実の楽しみは、軽便鉄道に乗ることの途中にあつた。その玩具のような可愛い汽車は、落葉樹の林や、谷間の見える山峽やを、うねうねと曲りながら走つて行つた。

或る日私は、軽便鉄道を途中で下車し、徒歩でU町の方へ歩いて行つた。それは見晴しの好い峠の山道を、ひとりでゆっくり歩きたかつたからであつた。道は軌道に沿いながら、林の中の不規則な小径を通つた。所々に秋草の花が咲き、赫土の肌が光り、伐られた樹木が横たわつていた。私は空に浮んだ雲を見ながら、この地方

の山中に伝説している、古い口碑こうひのことを考えていた。概して文化の程度が低く、原始民族のタブーと迷信に包まれてこの地方には、実際色々な伝説や口碑があり、今でもなお多数の人々は、真面目まじめに信じているのである、現に私の宿の女中や、近所の村から湯治に来ている人たちは、一種の恐怖と嫌悪けんおの感情とで、私に様々のことを話してくれた。彼らの語るところによれば、或る部落の住民は犬神に憑つかれており、或る部落の住民は猫神に憑つかれている。犬神に憑つかれたものは肉ばかりを食い、猫神に憑つかれたものは魚ばかり食って生活している。

そうした特異な部落を称して、この辺の人々は「憑つき村」と呼び、一切の交際を避けて忌み嫌きらった。「憑つき村」の人々は、年に一度、月のない闇夜やみよを選んで祭礼をする。その祭の様子は、彼ら以外の普通の人には全く見えない。稀まれれに見て来た人があっても、なぜか口をつぐんで話をしない。彼らは特殊の魔力を有し、所因の解らぬ莫大ばくだいの財産を隠している。等々。

こうした話を聞かせた後で、人々はまた追加して言った。現にこの種の部落の一つは、つい最近まで、この温泉場の附近にあった。今ではさすがに解消して、住民は何所どこかへ散ってしまったけれども、おそらくやはり、何所かで秘密の集団生活を続けているにちがいない。その疑いなし証拠として、現に彼らのオクラ（魔神の正体）を見たという人があると。こうした人々の談話の中には、農民一流の頑迷がんめいさが

主張づけられていた。否でも応でも、彼らは自己の迷信的恐怖と実在性とを、私に強制しようとするのであった。だが私は、別のちがった興味でもって、人々の話を面白く傾聴していた。日本の諸国にあるこの種の部落的タブーは、おそらく風俗習慣を異にした外国の移住民や帰化人やを、先祖の氏神にもつ者の子孫であろう。あるいは多分、もっと確実な推測として、切支丹宗徒の隠れた集合的部落であったのだろう。しかし宇宙の間には、人間の知らない数々の秘密がある。ホレーシオが言うように、理智は何事をも知りはしない。理智はすべてを常識化し、神話に通俗の解説をする。しかも宇宙の隠れた意味は、常に通俗以上である。だからすべての哲学者は、彼らの窮理の最後に来て、いつも詩人の前に兜を脱いでる。詩人の直覚する超常識の宇宙だけが、真のメタフィジックの実在なのだ。

こうした思惟に耽りながら、私はひとり秋の山道を歩いていた。その細い山道は、経路に沿うて林の奥へ消えて行つた。目的地への道標として、私が唯一のたよりにしていた汽車の軌道は、もはや何所にも見えなくなつた。私は道をなくしたのだ。

「迷い子！」

瞑想から醒めた時に、私の心に浮んだのは、この心細い言葉であつた。私は急に不安になり、道を探そうとしてあわて出した。私は後へ引返して、逆に最初の道へ戻ろうとした。そして一層地理を失い、多岐に別れた迷路の中へ、ぬきさしならず

入ってしまった。山は次第に深くなり、小径は荆棘の中に消えてしまった。空しい時間が経過して行き、一人の樵夫にも逢わなかった。私はだんだん不安になり、犬のように焦燥しながら、道を嗅ぎ出そうとして歩き廻った。そして最後に、漸く人馬の足跡のはつきりついた、一つの細い山道を発見した。私はその足跡に注意しながら、次第に麓の方へ下って行った。どっちの麓に降りようともし、人家のある所へ着きさえすれば、とにかく安心ができるのである。

幾時間かの後、私は麓へ到着した。そして全く、思いがけない意外の人間世界を発見した。そこには貧しい農家の代りに、繁華な美しい町があった。かつて私の或る知人が、シベリヤ鉄道の旅行について話したことは、あの満目荒寥たる無人の曠野を、汽車で幾日も幾日も走った後、漸く停車した沿線の一小駅が、世にも賑わしく繁華な都会に見えるということだった。私の場合の印象もまた、おそらくはそれに類した驚きだった。麓の低い平地へかけて、無数の建築の家屋が並び、塔や高樓が日に輝やいていた。こんな辺鄙な山の中に、こんな立派な都会が存在しようとは、容易に信じられないほどであった。

私は幻燈を見るような思いをしながら、次第に町の方へ近付いて行った。そしてとうとう、自分でその幻燈の中へ這入って行った。私は町の或る狭い横丁から、胎内めぐりのような路を通って、繁華な大通の中央へ出た。そこで目に映じた市街の

印象は、非常に特殊な珍しいものであった。すべての軒並のきなみの商店や建築物は、美術的に変った風情ふぜいで意匠され、かつ町全体としての集合美を構成していた。しかもそれは意識的にしたのでなく、偶然の結果からして、年代の錆さびがついて出来てるのだ。それは古雅おくりかで奥床おくゆかしく、町の古い過去の歴史と、住民の長い記憶を物語っていた。町幅は概して狭く、大通でさえも、漸く二、三間位げんであった。その他の小路は、軒と軒との間にはさまれていて、狭く入混いりこんだ路地ろじになつてた。それは迷路のように曲折しながら、石畳のある坂を下に降りたり、二階の張り出した出窓の影で、暗く隧道トンネルになつた路をくぐつたりした。南国の町のように、所々に茂つた花樹はが生え、その附近には井戸があつた。至るところに日影が深く、町全体が青樹の蔭のようにしっとりしていた。娼家しょうからしい家が並んで、中庭のある奥の方から、閑雅な音楽の音が聴きこえて来た。

大通の街路の方には、硝子窓のある洋風の家が多かつた。理髪店の軒先には、紅白の丸い棒が突き出してあり、ペンキの看板に Barbershop と書いてあつた。旅館もあるし、洗濯屋せんたくやもあつた。町の四辻に写真屋があり、その気象台のような硝子の家屋に、秋の日の青空が侘わびしげに映つていた。時計屋の店先には、眼鏡をかけた主人が坐つて、黙つて熱心に仕事をしていた。

街まちは人出で賑やかに雑鬧ざつたうしていた。そのくせ少しも物音がなく、閑雅にひっそり

と静まりかえつて、深い眠りのような影を曳いてた。それは歩行する人以外に、物音のする車馬の類が、一つも通行しないためであった。だがそればかりでなく、群集そのものがまた静かであった。男も女も、皆上品で慎み深く、典雅でおっとりとした様子をしていた。特に女性は美しく、淑やかな上にコケチツシユであった。店で買物をしてしている人たちも、往来で立話をしてしている人たちも、皆が行儀よく、諧調のとれた低い静かな声で話をしていた。それらの話や会話は、耳の聴覚で聞くよりは、何かの或る柔らかい触覚で、手触りに意味を探るといふような趣きだった。とりわけ女の人の声には、どこか皮膚の表面を撫でるような、甘美でうっとりとした魅力があった。すべての物象と人物とが、影のように往来していた。

私が始めて気付いたことは、こうした町全体のアトモスフィアが、非常に繊細な注意によつて、人為的に構成されていることだった。単に建物ばかりでなく、町の気分を構成するところの全神経が、或る重要な美学的意匠にのみ集中されていた。空気のいささかな動揺にも、対比、均斉、調和、平衡等の美的法則を破らないよう、注意が隅々まで行き渡っていた。しかもその美的法則の構成には、非常に複雑な微分数的計算を要するので、あらゆる町の神経が、非常に緊張して戦っていた。例えばちよつとした調子はずれの高い言葉も、調和を破るために禁じられる。道を歩く時にも、手一つ動かす時にも、物を飲食する時にも、考えごとをする時にも、着

物の柄を選ぶ時にも、常に町の空気と調和し、周囲との対比や均斉を失わないよう、デリケートな注意をせねばならない。町全体が一つの薄い玻璃で構成されてる、危険な毀れやすい建物みたいであった、ちよつとしたバランスを失つても、家全体が崩壊して、硝子が粉々に碎けてしまう。その安定を保つためには、微妙な数理によつて組み建てられた、支柱の一つ一つが必要であり、その対比と均斉とで、辛うじて支えているのであつた。しかも恐ろしいことには、それがこの町の構造されてる、真の現実的な事実であつた。一つの不注意な失策も、彼らの崩壊と死滅を意味する。町全体の神経は、そのことの危懼と恐怖で張りきつていた。美学的に見えた町の意匠は、単なる趣味のための意匠でなく、もつと恐ろしい切実の問題を隠していたのだ。

始めてこのことに気が付いてから、私は急に不安になり、周囲の充電した空気の中で、神経の張りきつている苦痛を感じた。町の特殊な美しさも、静かな夢のような閑寂さも、かえつてひっそりと気味が悪く、何かの恐ろしい秘密の中で、暗号を交しているように感じられた。何事かわからない、或る漠然とした一つの予感が、青ざめた恐怖の色で、忙がしく私の心の中を馳け廻つた。すべての感覚が解放され、物の微細な色、匂い、音、味、意味までが、すっかり確実に知覚された。あたりの空気には、死屍のような臭気が充滿して、気圧が刻々に嵩まつて行つた。此所に現象

しているものは、確かに何かの凶兆である。確かに今、何事かの非常が起る！ 起るにちがいない！

町には何の変化もなかった。往来は相変らず雑鬧して、静かに音もなく、典雅な人々が歩いてきた。どこかで遠く、胡弓をこするような低い音が、悲しく連続して聴えていた。それは大地震の来る一瞬前に、平常と少しも変らない町の様子を、どこかで一人が、不思議に怪しみながら見ているような、おそろしい不安を内容した予感であった。今、ちよつとしたはずみで一人が倒れる。そして構成された調和が破れ、町全体が混乱の中に陥入つてしまふ。

私は悪夢の中で夢を意識し、目ざめようとして努力しながら、必死に踉いている人のように、おそろしい予感の中で焦燥した。空は透明に青く澄んで、充電した空気の密度は、いよいよ刻々に嵩まつて来た。建物は不安に歪んで、病気のように瘠せ細つて来た。所々に塔のような物が見え出して来た。屋根も異様に細長く、瘠せた鶏の脚みみたいに、へんに骨ばつて畸形に見えた。

「今だ！」

と恐怖に胸を動悸しながら、思わず私が叫んだ時、或る小さな、黒い、鼠のような動物が、街の真中を走つて行つた。私の眼には、それが実によくはつきりと映像された。何かしら、そこには或る異常な、唐突な、全体の調和を破るような印象が

感じられた。

瞬間。万象が急に静止し、底の知れない沈黙が横たわった。何事かわからなかった。だが次の瞬間には、何人にも想像されない、世にも奇怪な、恐ろしい異変事が現象した。見れば町の街路に充満して、猫の大集団がうようよと歩いているのだ。猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫。どこを見ても猫ばかりだ。そして家々の窓口からは、髭の生えた猫の顔が、額縁の中の絵のようにして、大きく浮き出して現れていた。戦慄から、私は殆んど息が止まり、正に昏倒するところであった。これは人間の住む世界でなくて、猫ばかり住んでる町ではないのか。一体どうしたと言うのだろう。こんな現象が信じられるものか。たしかに今、私の頭脳はどうかしている。自分には幻影を見ているのだ。さもなければ狂気したのだ。私自身の宇宙が、意識のバランスを失って崩壊したのだ。

私は自分が怖くなつた。或る恐ろしい最後の破滅が、すぐ近い所まで、自分に迫つて来るのを強く感じた。戦慄が闇を走った。だが次の瞬間、私は意識を回復した。静かに心を落付ながら、私は今一度目をひらいて、事実の真相を眺め返した。その時モはや、あの不可解な猫の姿は、私の視覚から消えてしまった。町には何の異常もなく、窓はがらんとして口を開けていた。往来には何事もなく、退屈の道路が白つちやけてた。猫のようなものの姿は、どこにも影さえ見えなかった。そしてすつか

り情態が一変していた。町には平凡な商家が並び、どこの田舎にも見かけるような、疲れた埃っぽい人たちが、白昼の乾いた街を歩いていた。あの蠱惑的な不思議な町はどこかまるで消えてしまつて、骨牌の裏を返したように、すっかり別の世界が現れていた。此所に現実している物は、普通の平凡な田舎町。しかも私のよく知っている、いつものU町の姿ではないか。そこにはいつもの理髪店が、客の来ない椅子を並べて、白昼の往来を眺めているし、さびれた町の左側には、売れない時計屋が欠伸をして、いつものように戸を閉めてゐる。すべては私が知つてゐる通りの、いつもの通りに変化のない、田舎の単調な町である。

意識が此所まではつきりした時、私は一切のことを了解した。愚かにも私は、また例の知覚の疾病「三半規管の喪失」にかかったのである。山で道を迷つた時から、私はもはや方位の観念を失喪してゐた。私は反対の方へ降りたつもりで、逆にまたU町へ戻つて来たのだ。しかもいつも下車する停車場とは、全くちがった方角から、町の中心へ迷い込んだ。そこで私はすべての印象を反対に、磁石のあべこべの地位で眺め、上下四方前後左右の逆転した、第四次元の別の宇宙（景色の裏側）を見たのであつた。つまり通俗の常識で解説すれば、私はいわゆる「狐に化かされた」のであつた。

私の物語は此所で終る。だが私の不思議な疑問は、此所から新しく始まって来る。支那の哲人莊子せうしは、かつて夢に胡蝶こてつとなり、醒めて自ら怪しみ言った。夢の胡蝶が自分であるか、今の自分が自分であるかと。この一つの古い謎は、千古にわたつてだれも解けない。錯覚された宇宙は、狐に化かされた人が見るのか。理智の常識する目が見るのか。そもそも形而上けいじじょうの实在世界は、景色の裏側にあるのか表にあるのか。だれもまた、おそらくこの謎を解答できない。だがしかし、今もなお私の記憶に残っているものは、あの不思議な人外の町。窓にも、軒にも、往来にも、猫の姿がありありと映像していた、あの奇怪な猫町の光景である。私の生きた知覚は、既に十数年を経た今日でさえも、なおその恐ろしい印象を再現して、まざまざとすぐ眼の前に、はつきり見ることができるのである。

人は私の物語を冷笑して、詩人の病的な錯覚であり、愚にもつかない妄想もうそうの幻影だと言う。だが私は、たしかに猫ばかりの住んでる町、猫が人間の姿をして、街路に群集している町を見たのである。理窟りくつや議論はどうにもあれ、宇宙の或る何所かで、私がそれを「見た」ということほど、私にとって絶対不惑の事実はない。あらゆる多くの人々の、あらゆる嘲笑ちやうしやうの前に立つて、私は今もなお固く心に信じている。

あの裏日本の伝説が口碑こうひしている特殊な部落。猫の精霊ばかりの住んでる町が、確かに宇宙の或る何所かに、必らず実在しているにちがいないということ。

秋と漫歩

四季を通じて、私は秋という季節が一番好きである。もつともこれは、たいていの人に共通の好みであろう。元来日本という国は、気候的にあまり住みよい国ではない。夏は湿気が多く、蒸暑いことで世界無比といわれているし、春は空が低く憂鬱であり、冬は紙の家の設備に対して、寒さがすこしひどすぎる。（しかもその紙の家でなければ、夏の暑さがしのげないのだ。）日本の気候では、ただ秋だけが快適であり、よく人間の生活環境に適している。

だが私が秋を好むのは、こうした一般的の理由以外に、特殊な個人的の意味もあるのだ。というのは、秋が戸外の散歩に適しているからである。元来、私は甚だ趣味や道楽のない人間である。釣魚とか、ゴルフとか、美術品の蒐集などという趣味娯楽は、私の全く知らないところである。碁、将棋の類は好きであるが、友人との交際がない私は、めったに手合せする相手がないので、結局それもしないじまいである次第だ。旅行ということも、私は殆どしたことがない。嫌いというわけではないが、荷造りや旅費の計算が面倒であり、それに宿屋に泊ることが厭だからだ。こうした私の性癖を知ってる人は、私が毎日家の中で、為すこともない退屈の時間を殺すために、雑誌でもよんでごろごろしているのだろうと想像している。しかるに実際は大ちがいで、私は書き物をする時の外、殆ど半日も家の中にいたことがない。どうするかといえ、野良犬みたいに終日戸外をほつき廻っているのである。そ

してこれが、私の唯一の「娯楽」でもあり、「消閑法」でもあるのである。つまり私
が秋の季節を好むのは、戸外生活をするルンペンたちが、それを好むのと同じ理由
によるのである。

前に私は「散歩」という字を使っているが、私の場合のは少しこの言葉に適合しな
い。いわんや近頃流行のハイキングなんかという、颯爽たる風情の歩き様をするの
ではない。多くの場合、私は行く先の目的もなく方角もなく、失神者のようにうろ
うろと歩き廻っているのである。そこで「漫歩」という語がいちばん適切している
のだけれども、私の場合には瞑想めいそうに耽りふけ続けているのであるから、かりに言葉があつ
たら「瞑歩」という字を使いたいと思うのである。

私はどんな所でも歩き廻る。だがたいいの場合には、市中の賑やかな雑沓ざつたうの中を
歩いている。少し歩き疲れた時は、どこでもベンチを探して腰をかける。この目的
には、公園と停車場とがいちばん好い。特に停車場の待合室は好い。単に休息する
ばかりでなく、そこに旅客や群集を見ていることが楽しみなのだ。時として私は、
単にその楽しみだけで停車場へ行き、三時間もぼんやり坐っていることがある。そ
れが自分の家では、一時間も退屈でいることが出来ないのだ。ポオの或る小説の中
に、終日群集の中を歩き廻ることのほか、心の落着きを得られない不幸な男の話が
出ているが、私にはその心理がよく解るように思われる。私の故郷の町にいた竹と

いう乞食こじきは、実家が相当な暮しをしている農家の一人息子ひとりむすこで、家を飛び出して乞食こじきをしている。巡査が捕いえて田舎いなかの家に送り帰すと、すぐまた逃げて町へ帰り、終日賑やかな往来を歩いているのである。

秋の日の晴れ渡った空を見ると、私の心に不思議なノスタルジアが起つて来る。何処どことも知れず、見知らぬ町へ旅をしてみたくなるのである。しかし前にいう通り、私は汽車の時間表を調べたり、荷物を造つたりすることが出来ないで、いつも旅への誘いが、心のイメージの中で消えてしまう。だが時としては、そうした面倒のない手軽の旅に出かけて行く。即ち東京地図を懐中にして、本所深川ほんじよの知らない町や、浅草、麻布あさぶ、赤坂などの隠れた裏町を探して歩く。特に武蔵野むさしのの平野を縦横に貫通している、様々な私設線の電車に乗って、沿線の新開町を見に行くのが、不思議に物珍らしく楽しみである。碑文谷ひもんや、武蔵小山こやま、戸越銀座など、見たことも聞いたこともない名前の町が、広漠たる野原の真中に実在して、夢に見る竜宮城のように雑沓ざつさつしている。開店広告の赤い旗が、店々の前にひるがえり、チンドン楽隊の鳴らす響きこが、秋空に高く聴きこえているのである。

家を好まない私。戸外の漫步生活ばかりをする私は、生れつき浮浪人のルンペン性があるのか知れない。しかし実際は、一人で自由にいることを愛するところの、私の孤独癖こどくへきがさせるのである。なぜなら人は、戸外にいる時だけが実際に自由であ

るから。

易者の哲理

すべての易者たちは、彼の神秘的筮竹を探りながら、威嚇するやうな調子で言ふ。人間の一生は、天に於ける九星の宿位によつて、生れた最初の日から死ぬ時まで、必然に避けがたく豫定されてる。それ故に我々は、星占學の記入された簿記を調べて、君の生涯の第一頁から、奥付の終頁までを、確實に誤りなく、讀むことができるのである。

此處までの思想で見れば、易者の哲理は決定論に類屬して居た。それは科學の宇宙觀や、唯物主義の人生觀と同じく、すべての現象を、その生ずる前提條件の因果にたづね、偶然のない宇宙——宿命的、數學的に決定された人生——を説明して居るのである。けれども若しさうだつたら、何人も決して易者の占筮を乞はないだらう。何故といつて我々の運命は、易者の言ふ如く、過去にも、現在にも、未來にも、必然的に避けがたく決定されてる。丁度日影に蒔かれた貧弱の瓜の種から、一つの貧弱の苗が生え、蔓が伸び、やがて貧弱の實が成るやうに、人間の生涯もまた、最初の種と原因とに、すべての發展する將來の結果を内因して居る。瓜がいくら熱心に願つたところで、その他の何物にもなり得る筈がなく、星占學の簿記に書かれた人間の一生は、どんなインキ消を使用しても、斷じて消すことも變へることも出来ないものである。

さてそれならば、易者がどうして人の運命を自由に變化し、未來の幸福を指示す

ることができようか。易者に聞いても聞かないでも、豫定された未來の不幸は、必ず避けがたくやつて来る。さうして若しさうだとすれば、人は未來の運命から眼を閉ぢ、故意に知るまいとして努めるだらう。どんな物好きの死刑囚も、自分の刑の執行日をわざわざ看守に尋ねはしない。すべての人々は、未來を豫知できない故に生きながらへてる。だれがわざわざ、自殺するために易者の店を訪ふだらうか。逆に却つて人々は、星占學の辻占から、未來の漠然たる幸福——幸福があるだらうといふ運命の豫約——を期待して居る。そしてまた（皮肉なことには）いやしくも易者を訪ふほどのすべての人は、過去にも現在にも不運であり、それ故にまた將來の幸運さへも、概して豫想できないところの人々である。

すべての易者と星占家（家相家や、人相見や、八卦師や）は、かうした彼等の所謂亡者どもを濟度するため、矛盾にも此處で前説を豹變し、逆に今度は、意志の自由が運命を支配すること、自覺と心がけとによつて、何人も意識的に人相を變へ、惡しき手相を善き手相にし、自由に運命を支配し得ることを辯解する。かくも辻ツマの合はない非論理を、彼等は平然として言ふのである。「宿命のプログラムは、星の運行と共に決定されてる。だが人々は、それを預め自覺することによつて、來るべき災難を未然に防ぎ、大厄を小厄にし、幸運のチャンスをつ捉へ、すべてに於て將來を賢明に用意し得る」と。それからして演繹し、彼等一流の運命開拓法を説くので

ある。「君の今度の旅行は、東南に向つて出發なさい。必ず幸運が待つて居り、一舉にして大金が手に這入る。君の過去の不幸は、丑寅の方位に當る南天の樹の祟りであつた。よろしく速かに伐りなさい。必ず運命が一新する」等々。げに易者の哲理ほど、都合よく詭辯されたものはない。

散文詩 · 詩的散文

SENTIMENTALISM

センチメンタリズムの極致は、ゴーガンだ、ゴッホだ、ビアゼレだ、グリークだ、狂氣だ、ラヂウムだ、蝋だ、太陽だ、奇蹟だ、耶蘇だ、死だ。

死んで見給へ、屍蠟の光る指先から、お前の至純な靈が發散する。その時、お前は、ほんたうに OMEGA の、青白い感傷の瞳を、見ることが出来る。それがおまへの、ほんたうの、人格であつた。

なにもものもない。宇宙の『權威』は、人間の感傷以外になにもものもない。

手を磨け、手を磨け、手は人間の唯一の感電體である。自分の手から、電光が放射しなければ、うそだ。

幼兒が神になる。

幼兒は眞實であり、神は純一至高の感傷である、神の感傷は玲瓏晶玉の如くに透

純である。神は理想である、人は神になるまへに硝子玉がらすだまの如く白熱されねばならない。

眞實は、實體である、感傷は光である。

幼児の手が磨かれるときに、琥珀が生れる。彼は眞珠となる。そして昇天する。

實體の瓦石は、磨いても光らない。

實體の瓦石とは、生れながらの成人おとなである。パリサイの學徒である。眞實のない

製詩職工である。

涙の貴重さを知らないものに眞實はない。

哲人は詩人と明らかに區別される。彼は、最もよく神を知つて居ると自負するところの、人間である。然も實際は、最もよく神を知らない、人間である。彼は偉大である、けれども決して神を見たことがない。

神を見るものは幼児より外にない。

神とは『詩』である。

○哲○學○は、概念である、思想である、形である。

詩は、光である、リズムである、感傷である。生命そのものである。

哲人も往往にして詩を作る。ある觀念のもとに詩を作る。勿論、それ等の詩（？）は、形骸ばかりの死物である。勿論、生命がない。感動がない。

然るに、地上の白痴ほかは、群集して禮拜する。白痴の信仰は、感動でなくして、恐怖である。

下品ほんの感傷とは、新派劇である。中品の感傷とはドストエフスキイの小説である。上品の感傷とは、十字架上の耶穌である、佛の涅槃である、あらゆる地上の奇蹟である。

大乘の感傷には、時として、理性がともなふ。けれども理性が理性として存在する場合には、それは觀念であり、哲學であつて『詩』ではない。

感傷の涅槃にのみ『詩』が生れる。即ち、そこには何等の觀念もない、思想もない、概念もない、象徴のための象徴もない、藝術のための藝術もない。

これはただの『光』である。

七種の繪具の配色は『光』でない。『光』は『色』のすさまじい輪轉である。純一である。炎燃リズムである。そして『光』には『色』がない。

色即是空、空即是色。

藝術の生命は光である。斷じて色ではない。

リズムは昇天する。調子は夕闇の草むらで微動する。

我と人との接觸、我と物象との接觸、我と神との接觸、我と我との接觸、何物も接觸にまさる歡喜はない。この大歡喜が自分の藝術である。

自分は神と接觸せんとして反撥される、自分は物象と接觸せんとして反撥される、自分は戀人と接觸せんとして反撥される。その反撥の結果は、何時も何時も、我と我とが固く接觸する。接觸の所産は詩である。

未來、自分は感傷の涅槃にはいる、萬有と大歡喜を以て、接觸することが出来る。
現在、及び過去の自分は未成品である。道程である。

——人魚詩社宣言——

遊泳

白日のもと、わが肉體は遊樂し、沒落し、浮びかつ浪を切る。

けふわが生くるは、わが遊戲をして、光り、かつ眞實あらしめんためなり。わが輝やく城の肢體をしてみがきしたしく魚らと淫樂せしめてよ。

奇蹟金銀

祈祷晶玉

海底詠嘆

海上光明

しんしんたる浪路のうへ、祈れば我が手につながれ、あきらかに珊瑚の母體は昇天す。

母體は昇天す、このときみなそこに魚介はしづみ、いつさいに哀しみの瞳ひとみをあげて合唱しあなや合讀したてまつる。

さんたくるす

さんたくるす

遊樂至上のうみのうへ、岬をめぐる浪のうたかた、浪とほれば鳥禽の眼にも見えぬ、況んや白日の幽靈は、いと遙かなる地平にかけをけちゆくごとし。

ああ、まぼろしのかもめどり、渚はとほく砂丘はさんらん、十字の上に耶蘇はさんらん、女をみなの胸は砂金に研がれ、その陰部もさんらん、光り光りてあきらかに眞珠をはらむ。

白日のもと、わが肉體は遊樂し、没落し、浮びかつ浪を切る。

秋日歸郷

—妹にあたふる言葉—

秋は鉛筆削のうらかな旋回に暮れてゆく。いたいけな女心はするどくした炭素の心の觸覺に、つめたいくちびるの觸覺にも涙をながす。

しみじみと涙をながす。とき子よ、君さへ青い洋紙のうへに魚を泳がしむるの秋だ。眞に秋だ。

ああ、春夏とほくすぎて兄は放縱無頼、酒狂して街にあざわらはれ、おんあい至上のおんちちははに裏切り、その財寶たからを盗むものである。

おん身がにくしんの兄はあまりに憔悴し、疾患し、酒亂のあしたに菊を摘まむとして敬虔無上の涙せきあへぬ痴漢である。

また兇盜である、聖者である。妹よ、兄の肉身は曾て一度も汝の額に觸れたことはない。

見よ、兄の手は何故にかくもかくも清らに傷ましげに光つて居るのか、

この手は菊を摘むの手だ、

この手は怖るべき感電性疾患の手だ、

また涼しくも洋銀の柄にはしり、銀の FORK をしてしなやかに皿の魚を舞はしむる風月賀宴の手だ。

兄は合掌する。

兄は接吻する。

兄は淫慾のゆふべより飛散し散亂し、しかも哀しき肉身交歡の形見をだにもとめない頽廢徳者だ。

おん身の兄はおん身を愛することによりて、おん身に一ダースの鉛筆と一かけの半襟を買ふことにすら、尚かぎりなき愛惜の涙を、われとわれの眞實至聖の詩篇に流さんとする者である。

兄は東京駒込追分の坂路に夕日を浴びて汝に水桃を捧げんとする。

想ふ、かつて内國勸業博覽會の建物は紙製の樓塔に似た一廓をなし、飛行機のプロペラその上に鳴る。

兄は哀しくなる、妹よ、都にあれば、しんに兄は哀しくなる。

すべては過去である、そして現在である。

遠ければ遠いほど、兄の眞實は深くなり、兄の感傷はたかぶる。

妹よ、

黎明に起きて兄の生きた墓前に詣でてくれ。み寺に行く路は遠くとも、必ずともに素足にて徒歩かちまうでかし。なんぢの白いあなうらもつめたい土壌と接觸するときに、兄の戀魚はまあたらしい墓石の下によるこびの目をさます。その兄のめざめを感じ、おまへの素足に痙攣する地下電流の銅線をふんでわたれ。きけ、遠い遠い靈感の墓場で兄の精靈がおまへを呼んで居る。

妹よ、

み寺に行く途は遠くとも朝のちよこれいと、の興奮を忘れるな。

妹よ、

凝念敬具。

おんみが菊をさげて歩むの路を清淨にせよ。

ああ、秋だ、

秋だ、

兄の手をして血縁けちえんの墓石にかがやかしむるの秋だ。

妹よ、

兄が純金の墓石の前に、菊を捧げて爾が立つたとき、兄はほんたうにおん身に接吻する。おん身にくしんに、額に、唇に、乳房に、接吻する。

妹よ、

いまこそなんぢに告ぐ、

われらいかに相愛してきへあるに、兄の手は、足は、くちびるは、かつて一度もなんぢの肉身に觸れたことさへないのである。

とき子よ、

兄は哀しくなる、しんに兄は哀しくなる。

めいりいごうらうんど、靈性木馬のうへのさんち、まんだり、ずむ、をきみは知るか。

木馬はまはる、

光はまはる、

兄の肉體は疾風のやうに旋回する、

兄の左に少女がじつと立つて居る、

白い前かけをした娘だ、

娘のくちびるが、あかいくちびるが、林檎が、しだいに、あざやかに、私のくちびるを追ひかける。

めいりいごうらうんど、

木馬がまはる、

世界がまはる、

光がまはる、

この廻る、むらさきの矢がすりの狂氣した色の世界に娘は立つて居る。

さうして、また、くちびると、くちびると。

秋だ、

兄の肉身はかうして靈感の天界へ失踪する、

はなればなれのくちびるとくちびると、

木馬は都會を越え群集を越え雑鬧を越え、いつさいを越えて液體空氣の圏中にほろ

び行くまで、

おんみよ、

異性のりずむとはかうも遠く近く夢みるごとく人の世にうら哀しいものか、

淺草公園秋の夕ぐれ、

めいりいごうらうんど靈性木馬の旋回、

磨きあげた鋼鐵盤の白熱廻轉だ、

想へ、切に切にそが上に昏絶せむとする兄の瘦せはてた肉身のいたましさを、

兄は畜生にもあらず、

兄は佛身にもあらず、

兄はいんよく極まりなき巷路の無名詩人だ、

いもうとよ、

なんぢの信仰を越えて兄を愛するとき、なんぢのもろ手を合せてくれ。遠い故郷ふるさとから、兄の眞實のために聖母のまへに合掌して祈つてくれ。

秋だ、

すべて私を信頼し、私を愛するもののために、私はかぎりなき涙を流す。

いぢらしい私の涙は遠く別れた同性の友のうへにもながれる。

友を思うて都の高臺にいちにちを泣きくらす。松の青葉に晴れすぎし天景のおもひでにさへさしぐむものを。

いもうとよ、

光る兄の靴からかずかぎりなき私の旅行記念を吸つてくれ、

魚に似たる手をもつて私の哀傷を擦つてくれ、

けふちははの家にかへらば、あした遠い都に兄の生きた墓場をきづいてくれ、
菊の、光る、感傷の、純金の墓場をきづいてくれ、

妹よ、

兄の肉と血をもつて爾の愛人にはなむけするな、

兄の身は疾患頽唐のらう、まぢぢぢ、

兄の靈智は遠いけちえんの墓石に光るラヂウム製の青い螢だ、

妹よ、祈る。

とりわけてなんぢのをさな兒のうへにも榮光あれかしと。

感傷詩論

感傷至極なれば身心共に白熱す、電光を呼び、帷幕を八裂するも容易なり。

天使も時に哀しめども蛇は地上に這ひて泣かず、感傷の人は恆に地に立ちて涙をのむ。

感傷必ずしも哀傷にあらず、憤怒も歡喜もその極に達すれば涙ながる、然れども涙なきものは感傷にあらず。

感傷なき藝術は光なき晶玉の如し、實質あれども感動なし。

女人に感傷なし、然れども感傷の良電體。

ひとびとよ、美しきひとびとよ、つねに君はせ、んち、めんたる、なれ。

昔より言ふごとく死人は白玉樓中にあり。

感傷至上の三昧は玲瓏たり、萬有にリズムを感じ、魚鳥も屏息し、金銀慟哭す。

純銀感傷の人室生犀星。

感傷の人犀星に逢へば菓子も憔悴す。

感傷は理智を拒まず、却つて必然に之を抱擁す、

感傷とは痴愚の謂にあらず、自覺せざる哲理なり、前提を、忘れたる、結論なり。而し

て藝術と科學との相違は單に此の一點に存す。

耶蘇の素足は砂にまみれ、その手は奇蹟を生み、その言葉は感傷に震へたり。彼の説くところは道理にあらずして信仰なりき、概念にあらずして祈禱なりき。然もたれか聖書に哲學なしと言ひ得るものぞ。

理智が感情と並行し、或は之を超越せる場合に於ては祈禱あることなし。ただ感情が理智を摺伏する刹那にのみ詠嘆と祈禱はあり。

祈禱とは奇蹟を希願ふの言葉、而して詩は地上の奇蹟。

涙の甘くして混濁せるものを詠嘆と呼び、涙の苦くして透純せるものを感傷と呼ぶ。

詠嘆もまた幼年期の感傷と言ふを得べし、而して短歌の生命は詠嘆を出でず、格調に捉はるれば也。

感傷が白熱するとき言葉は象徴の形式を帶ぶ、あらゆる藝術の至上形式は象徴にあり、

然りと雖も形式は結果にして、目的にあらず、象徴のための象徴の如きは畢竟藝術上の遊戯にあらずして何ぞや。

象徴とは必ずしも不徹底乃至朦朧ないしを意味するものにあらず、ロダンの藝術が如何に鮮明なる輪廓を有するかを想へ、ゴッホの藝術が如何に強烈なる色彩を有するかを想へ。然もたれか彼等に象徴なしと言ふものぞ。

刷毛を以てある種の畫面を洗ふは象徴の一手段なり、然れども全般の手段にあらず。象徴の意義をしかく縹渺模糊たる境地にのみ限らんとするは甚だしき偏見なりと言はざるべからず。煙と霧とを描くことをもて我の藝術なりと言ふはよし、然れども太陽の象徴を畫くものを目して異端となすは甚だ良ろしからず。斯くの如き形式のもの象徴なり、斯くの如き形式のものは象徴にあらずと言ふは愈々不可なり、恐らくは象徴詩をして遊戯に墮落せしめん。詩の生命は形式にあらずして、リズムにあれば也。

藝術上の遊戯とは必然性なき創作を言ふ、生活を畫くもの必ずしも眞實にあらず花鳥風月を唄ふもの必ずしも遊べるにあらず。

賭博は社會觀念より遊戲と目さるるも賭博者自身は遊戲を行へるにあらず、彼は一心不亂なり、時に生命いのちがけなり、此の場合に於ては賭博もまた靈性を有す。

怠惰なる農夫にとりては耕作も遊戲なり、

所謂、遊戲は眞の生活にして、所謂、生活は多くの場合に遊戲なり。

遊戲の眞實、生活の虚偽を想へ。

遊戲を愛せざる且つ知らざるものに眞の生活あることなし、遊戲とは、生命意識の具象化されたる躍動なり。

あらゆる遊戲を賤辱したる昔時の日本人の生活を想へ。眞に生くるものは貴族にして賤民にあらず、賤民に遊戲なる生活なし。

西洋人の思想を受賣りするより外に能なき術學屋と流行屋を葬れ。

乞食をしても葉卷煙草を吸ふ者は室生犀星一人のみ。

眞に彼は賤民貴族の公爵なる哉。

詩は斷じて空想に非ず、實驗の世界なり。

奇蹟は感動にして形體に非ず、天國を説かんとするものは必ずその口を緘せらる。此の故に詩人の武器は言葉に非ずして傳熱なり。抽象にあらずして象徴なり。

いやしくも理智又は意志がその概念を展開したる祈禱は虚偽なり、かくの如き祈禱には感應あることなし。眞まことに祈禱するものは一所懸命なり、祈禱者はその心靈に於て明らかに神と交歡す、彼自ら何を言ひ何を語りつつあるかを知らざる也。

奇蹟を啓示するものは神なり、神とは宇宙の大精力なり、而して之と交歡し得るもの人間の感傷以外にあること無し。

幼兒と聖人は神に聽かれんために祈禱し、術學者及び説教者は傍人に聽かれんために祈禱す。

前者の祈禱は『詩』なり、その最も單純なるものと雖も尚『詩』といふを得べし。後者の祈禱に至りては『演説』にして詩に非ず、その最も幽邃深玄を極むる者と雖も尚詩形を借りたる論文に外ならず。而して祈禱に概念あることなし。

西洋人は眞に詩を理解する人種にあらず、彼等の感傷はあまりに混濁す、その最も透純なる者と雖も尚芭蕉に及ばず北原白秋に遠く及ばず。

詩とは『光』なり光體にもあらず。

幼兒の眞實を嘲笑するものは必ず術學の徒なり、萬葉集の詠嘆は單純なれども千載の後その光を失ふことなし。幼年期の哲理は後に必ず嘲笑さるる秋あるも幼年期の眞實は永劫にその光を失ふことなし。

最も貧弱なる『光』も尚最も巨大なる『物體』にまされり、萬葉の戀歌一首はソクラテスの教理よりも劫久なる生命を有す。

『光』は感傷に發す、眞實の核を磨くことにより。

足は天地に垂降するの足、

手は地上に泳ぎて天上の泉をくむの手、

諸君、肉身に供養せよ、

諸君、おん手をして泥土にけがさしむる勿れ、詩人をして賤民の豚と交接せしむる勿れ、生活に淫する勿れ、手をして恆に高く頭上に輝やかしめ、肉身をして氷山の頂上に舞ひあがらしめよ、

ああ、香料もて夕餐の卓を薫郁せしめよ。

感傷奇蹟、絶倒せんとして視えざる氷をやぶり、疾行する狼を殺す、畜生の如きも金屬なれば閃電を怖るる事もつとも烈し、詩人よ汝の手を磨け。

感傷の權威を認めざるものは始めより詩を作らざるに如かず。

——人魚詩社宣言——

聖餐餘録

食して後酒盃をとりて曰けるは此の酒盃は爾曹の爲に流す我が血にして建つる所の新約なり、

鐘鳴る。

我れの道路に菊を植ゑ、我れの道路に霜をおき、我れの道路に琥珀をしけ。

道路はめんめんたる一列供養のみち、夕日にけふる愁ひの坂路、またその坂を昇り降らむとする聖徒勤行の路でもある。

鐘鳴る。

鐘鳴る。

エレナよ。今こそ哀しき夕餐の卓に就け。聖十字の銀にくちづけ、僧徒の列座を超え、雲雀料理の皿を超え、汝の香料をそのいますところより注げ。

ああ、いまし我の輝やく金屬の手に注げ、手は疾患し、醋蝕し、するどくいたみ針の如くになりて、觸るるところ、この酒盃をやぶり汝のくちびるをやぶるところの手だ。

ああ、いま聖者は疾患し、菊は疾患し、すべてを超えて我れの手は烈しく疾患する。

見よ、かがやく指を以て指さすの天、指を以て指さすの墳墓にもある。その甚痛のするどきこと菊のごときものはなく、菊よりして傷いたみを發すること疾患聖者の手のごときものはない。

愛する兄弟よ。

いまこそわが左に來れ。

汝が卓上に供ふるもの、愛餐酒盃の間、その魚の最も大なるものは正しく汝の所有である。

爾は女の足をひきかつぎ寝ねることによりて、その素足に供養し流涕することによりて、爾の魚の大をなす所以である。

まことに夜陰に及び、汝が邪淫の臥床ふしどにさへ下馬札を建てるところの聖徒である。

凡そ我れの諸弟子諸信徒のうち、汝より聖なるものはなく、汝より邪慾のものはない。乞ふ、われはわれの肉を汝にあたへ、汝を給仕せんがために暫らく汝の右に坐することを許せ。

ああ、この兄弟よ、ふうしきの徒よ、爾は愛するユダである。我をあざむき賣うらむとし、我を接吻せんとする一念にさへ、汝は連坐頌榮の光輪を一人負ふところの聖徒である、『愛』である。

愛する兄弟よ。

而して汝は氷海に靈魚を獲んとするところの人物である。

肉親の骨肉を負ひて道路に跣行し、肉を以て氷を割らんとするの孝子傳奇蹟人物である。

みよ、汝が匍行するところに汝が蒼白の血痕はあり。

師走に及び、汝は恆に磨ける裸體である。汝が念念祈祷するときに、菓子^{モリ}の如きものの味覺を失ひ、自働電話機の如きさへ甚だしく憔悴に及ぶことあり。

汝は電線を渡りてその愛人の陰部に没入に及ぼんとし、反撥され、而して狂奔する。況んや爾がその肉親のために得るところの鯉魚は、必ずともに靈界天人の感應せる、或はその神祕を啓示するところにならざるべからず。

愛する兄弟よ、まことに師走におよび、爾は裸體にして氷上に匍匐し、手に金無垢の魚を抱きて慟哭するところの列傳孝子體である。

諸弟子。

諸信經の中、感傷品を超えて解脱あることなし。萬有の上に我れをあげ、我れの上に爾曹のさんち、まんたる、を頌榮せよ。

今宵、あふぎて見るものは天井の蜂巢蠟燭、伏して見るものは女人淫行の指、皿、魚肉、雲雀、酒盃、而して我が疾患蝕金の掌と、輝やく氷雪の飾卓晶峯とあり。

みよ、更に光るそが絶頂にも花鳥をつけ。

ああ、各々の肩を超え、しめやかに薫郁するところの香料と没薬と、音楽と夢みる香爐とあり。

諸使徒。

われと共にあるの日は恆に連坐して酒盃をあげ、交歡淫樂して一念さ、んち、ま、ん、た、り、ず、む、を、頌、榮、せ、よ。

蓋し、明日炎天に於て斷食苦行するものはその新發意、道心のみ、もとより十字架にかかる所以のものは我れの涅槃に至ればなり。亞眠。

—人魚詩社信條—

光の説

光は人間にある

光は太陽にある

光は金屬にある

光は魚鳥にある

光は螢にある

光は幽靈の手にもある。

幽靈の手は鋼鐵製である、鋭どくたたけばかんかと音がする。

幽靈の手は我的手だ、我的手を描くものは、幽靈の手を描くものだ。然も幽靈を見るものは尠ない。

幽靈とは幻影である、あやまちなき光の反射である。

幽靈は實在である、妄想ではない。

夢を見ないものは夢の眞實を信じない。

幽靈を見ないものは幽靈の眞實を理解しない。

光は『形』でなくて『命』である。概念でなくてリズムである。光は音波でもある、熱でもある、ええ、てる、でもある。所詮、光は理解でなくて感知である。

光とは詩である。

詩の本體はセンチメンタリズムである。

光は色の急速に旋廻した炎燃リズムである。色には七色ある。理智、信條、道理、意志、觀念、等その他。

光の中に色がある。

光から色を分析するためには、分光機が必要である。

然もさういふ試験は理學者にのみ必要である。(貧弱な國家には完全な分光機を持つた學者すらも居ない。)我我は光を光として感知すれば好い、何故ならば、光は既に光そのものであつて色ではない。

色は悉く概念である。

盲目は光を感知しない、——或は感知しても自ら気がつかない——。

盲目は形ある物象以外のものを否定する。

白秋氏の詩に哲學がないと言つた人がある。無いのではない、見えないのだ。

色が色として單に配列されたものは、哲學である、科學である、思想である、小説である。

色が融熱して廻轉を始めたときに、色と色とが混濁して或る一色となる。けれども夫れは色であるが故に尚概念である。すなはち感傷の油を差して一層の加速度を與へた場合に始めて色は消滅する。すなはち『光』が生れる、すなはち『詩』が生れる。

熱は眞實である、光は感傷である。

色が色として見えるやうなものは光でない、物體である。斷じて詩ではない。

* * *

螢の光は戀である。

女の美は淫慾である。

あらゆる生物のパツシヨンは光である。けれどもあらゆる光が必ずしもパツシヨンではない。

聖人の輪光は肉體をはなれて見える。

パツシヨンばかりが詩ではない。

センチメンタルばかりが詩である。

光輪も聖人の怒と哀傷とによつて輝く。

足が地上を離れんとして電光に撃たれる。自分の肢體が金粉のやうに飛散する。

月光の海に盲魚が居る。

眞實は燐だ、感傷は露だ。

光は天の一方にある、空の清明を照映するために我の額は磨かれる、一心不亂に磨きあげられる。

鶯鳥は純金の卵を生む。自分の安住する世界はいつも美しい、夢のやうに不可思議で、夢のやうに美しい。

手の幻影

白晝或は夜間に於て幻現するところの手は必ず一個である。左である。

而してそは何びにも語ることを禁ぜられるところのあるもの手である。

手は突如として空間に現出する。時として壁或は樹木の幹にためいきの如き姿を幻影する。

手は歴史として發光する。

手はしんしんとして疾患する。

手は酸蝕されたる石英の如くにして傷みもつとも烈しくなる。

手は白き金屬のごときものを以て製造され透明性を有す。

われの手より來るところの恐怖は、しばしばその手の背後に於て幽靈をさへ感知する。

微笑したるところの幻影であり、沈黙せる遠きけち、えんの顔面であることを明らかに知覺するとき我は卒倒せんとする。

我はつねに『先祖』を怖る。

危険なる新光線

疾患せる植物及び動物の脊髄より發光するところの螢光又はラジウム性放射線が、如何に我の健康に有害なるかを想へ、斯くの如き光線は人身をして糜爛せしめ、侵蝕せしめずんば止まず。新らしき人類をして悲惨なる破滅より救助せしめんがため、科學者は新らたに發見を要す。

懺悔者の姿

懺悔するものの姿は冬に於て最も鮮明である。

暗黒の世界に於ても、彼の姿のみはくつきりと浮彫のごとく宇宙に光つて見える。
見よ、合掌せる懺悔者の背後には美麗なる極光がある。

地平を超えて永遠の闇夜が眠つて居る。

恐るべき氷山の流失がある。

見よ、祈る、懺悔の姿。

むざんや口角より血をしたたらし、合掌し、瞑目し、むざんや天上に縊れたるもの、光る松が枝に靈魂はかけられ、霜夜の空に、凍れる、凍れる。

みよ、祈る罪人の姿をば。

想へ、流失する時劫と、闇黒と、物言はざる刹那との宇宙にありて、只一人吊されたる単位の恐怖をば、光の心霊の屍體をば。

ああ、懺悔の涙、我にありて血のごとし、肢體をしぼる血のごとし。

鼠と病人の巣

密房通信

しだいに春がなやましくなり、病人の息づかひが苦しくなり、さうしてこの密房の天井はいちめんに鼠の巣となつてしまった。

鼠、巣をかけ。鼠、巣をかけ。

うすぐらい天井の裏には、あの灰色の家鼠がいつぱいになつて巣をかけてしまった。巣がかかる、巣がかかる、ああ、天井板をはがして見れば、どこもかしこも鼠の巣にてべたいちめんである。

みよ、ひねもす、この重たい密房の扉から、私の青白い病氣の肉體が、影のやうに出入し、幽靈のやうに消滅する。

祈りをあげ、祈りをあげ、さくらはな咲けども終日いのりて出でず。

ときに私の心霊のうへを、血まみれになつた生物の尻尾が、かすめて行く。それだけを見とめる。しんに奇蹟とは一刹那の光である。

いよいよ微かになり、いよいよ細くなり、いよいよ鋭くなり、いよいよ哀しみふかくなりゆくものを、いまこそ私はしんじつ接吻する。指にふれ得ずして、指さきの纖毛に觸れうるものの感覺到、私の心霊は光をとぎ、私のせんちめんたるは錐のごとくなる。

ああ、しかし、いまは一本のかみ、の毛にさへ、全身の重量をささへうることの出来るまでに、あはれな病人の身體は憔悴してしまつた。

私はいまそれを知らない。

何故にこの部屋の天井が、いちめん、にねずみの巢となつたかを知らない。

ただ、私は私の左の手の食指から、絹糸のやうなものが、いつもたれさがつて居るのをいつしんふらんにみつめて居る。

いちにち、瓦斯すとほぶの火は青ざめて燃えあがり、密房の壁には、しだいしだいに怖ろしいものの形容を加へてくる。

今こそ、私は祈らねばならぬ。

齒をくひしめ、くちびるを紫にしていのらねばならぬ。

ああ、ねずみ巢をかけ。密房の家根裏はまつくらになつてしまった。私の病氣はますます青くなり。おとろへ。

海のあなたを夢みるやうに、うらうら櫻の花が咲きそめ。

—四月三日—

言はなければならぬ事

私は子供のときからよくかういふ事を考へるくせがある。自分が若しある何等かの重大なる神罰を蒙るとか、又は氣味の悪い魔術にかかるとかして……お伽話にあるやうに……私の肉體が人間以外の動物に變形した場合の生活はどうであるかと。

たとへば私が人氣のない寂しい森を散歩して居る中に、突然 Fairy といふやうなものが出て私といふ人間を一足の犬に變形してしまふ。

私は尻尾をひきずりながら主人の家、ではない私自身の家に歸つてくる、私はいきなり懐かしい母の姿を見つけてこの恐ろしい事件の顛末を訴へようと試みる。併し、母は一足の見知らぬ犬としか私を認めてくれない。私がいろいろな仕方、尻

尾をふつたり、吠えたり、嘗めたりするにもかかはらず母には少しも犬の意志が通じない。そのうへ私が悲鳴をあげて泣き叫ぶにもかかはらず、種々な迫害を加へた上、私を庭の外へ追ひ出してしまふ。

世の中にこんな取り返しのない悲惨な出来事があらうか。犬の意志が人間に通じないと言ふことは驚くべき神の悪戯である。

而して、もちろん、詩人としての私は魔術にかかつた犬である。

動物が動物同士で會話するといふことは、驚くべきことである。

犬や、猫や、蛤や、鷺鳥の類が、人間に解らないある種の奇怪な言語、又は動作をもつて、全く人間の知らない未可見の事實を語りあつて居るといふことは、眞に驚くべきことである。

彼等は人間のもつて居ない特種の官能器官をもつて居る。そして人間の見ることの出来ない物象を見て居る。人間の聴くことの出来ない音をきいて居る。未來に生ずべき天變地異を感知して居る。そして彼等はつねにかういふ隠れたる世界の祕密について語りあつて居る。二足以上の動物が長いあひだ向ひ合つて居るのを見るときに、私は奇怪な恐怖からまつ、青になつてふるへあがる。

どんな人間でも、彼等の言ふ言語の意味を考へる場合に戦慄せずには居られない

筈である。

私はまた、種々な動物に對して或る特種な感覺と恐怖と好奇心とを持つて居る。それで『動物心理學』や『生物哲學』のやうな書物をいつしんに研究して見た。併しそれらの書物にはなんにも書いてなかつた。私はまつ白な紙と、人間の智識の淺薄なことにつくづく退屈してしまつた。

私は時として私の肉體の一部がしぜんに憔悴してくることを感ずる。そのとき手に觸れた物象は、みるみる針のやうに細くなり、絹糸のやうになり、しまひには肉眼で見ることでもできないやうな纖毛になつてしまふ。そしてその纖毛の先から更に無數の生毛うぶが光り出し、煙のやうにかすんで見える。

じつとそれを見つめて居るときに、私は胸のどん底から込みあげてくるところの、なんとも言ひやうのない恐ろしい哀傷をかんずる。

私は兩手にいつぱいの力をこめて、その光る纖毛の一本を根こんかぎりにつかまうとする。眼にもみえざる白い生毛に私の全神經をからみつける。そんなかすかな哀れなものに、私の總體の重力で心ゆくばかりすがりつきたいのである。

私の神経はむぐらもちのやうにだんだん深く地面の下へもぐりこむ。不幸にして私の肢體の一部が地面の上に残つて居るとき、不注意な園丁がきて、それを力まかせに張りとばすのである。無神経な男の眼には木の根つ株かなんかのやうに見えたのである。しかし私の張りさけるやうな苦痛の絶叫をたれ一人として聞いてくれたものは此の地上にない。

私はいつでも孤獨である。言語に絶えた恐ろしい悲哀を私一人でじつと噛みしめて居なければならぬ。生きながら墓場に埋められた人の絶望の聲を地上のだれがきくことが出来るか。

私が根かぎり精かぎり叫ぶ聲を、多くの人は空耳にしかきいてくれない。私の頭の上を踏みつけて此の國の賢明な人たちが斯う言つて居る。

『詩人の寢言だ』

此の國でいちばん眞實のある人間は詩人である。少なくとも彼等は自分の藝術を賣物にして飯を食はうなどは夢にも思つて居ない。(實際に於てもそれは不可能だ)。

考へても見ろ、どんな種類の人間が、肉を削るやうな苦しい思をして一文にもな

らない勞作をして居るか。言ふだけのことを言ひ切らねば、私は干物になつても死にきれない。

自分の言ふ言葉の意味が、他人に解らないといふことはどんなに悲しいことであるか。自分の思想が他人に理解されないといふことは死刑以上の苦しみではないか。私はまいにち苦行僧のやうな辛苦を嘗めつくして居るにもかかはらず、私のもつて居るリズムの百分の一も表現することが出来ない。

けれども萬一、私が『表現の祕訣』を握つたあかつきには、私は私の藝術を捨てることを躊躇しない。なんとなればそれ以上の藝術は、どんな人にとつても必要以上のぜいたくである。

私の詩の生命は、創作後一時間乃至一晝夜である。少なくともその時間だけは立派に光つて見える。併しあとになつて私はいつも騙された人の憤怒と慚愧と失望とを感じずには居られない。私は翌月の雑誌に印刷された自分の詩篇に對し、羞恥とまつかの顔をしながら取消しを申込むものである。

私は私の肉體と五官以外に何一つ得物をもたずに生れて來た。そのうへ私は書物

といふものを馬鹿にして居る。そして何よりもきらひなことは『考へる』といふことである。(詩を作る人にとつて、い、ち、ば、ん、悪い病氣は考へるといふことである。中年の人はよく考へる。考へるといふことを覺えた時その人は詩を忘れてしまったのである)。

そこで私の方針は、耳や、口や、鼻や、眼や、皮膚全體の上から眞理を感得することになつて居る。言はば私は生れたままの素つ裸で地上に立つた人間である。官能以外に少しでも私の信賴したものはなく、感情以外に少しでも私を教育したものはなかつた。人間のつくつた學校はどこでも私を犬のやうに追ひ出した。

五官を極度に洗練することによつて人はさまざまの奇蹟を見ることが出来るやうに成る。たとへば空氣色だの、音の色彩だの、密閉した箱の中にある物品だの。

神祕と眞理と奇蹟とは三位一體である。

眞理とは五感の上に、建てられたる、第六感の意義である。いやしくも五感以外の方法、たとへば考察や冥想や空想によつて神祕を感觸したと稱するものがあれば、それは詐欺師であるか狂人であるかの一つである。若しどつちでもないとすれば、救ふべからざる迷信に墮したものである。ウイリアム・ブレークの徒である。

詩とは五官及び感情の上に立つ空間の科學である。

五感およびその上に建てられたる第六感以外に人間の安心して信頼すべきものは一つもない。

天に達するの正しい路は感傷の一路である。

私は私の驚くべき神経の Tremolo から色々な奇蹟を見る。その奇蹟が私を悲しませる。私の詩はすべて私の實感から發した『肉體の現状』に關する報告である。私が言はなければならぬことと言つたのは此の事である。

握つた手の感覺

四月十九日の朝、私は書齋の卓に額をうづめながらすすりなきをして居た。まるでお母さんのふところに抱かれた子供が、甘つたれてすすりなきをするときのやうな、なんともいへない SWEET の感傷が、私の總身をしびれるやうにふるはせた

のである。しまひに私はおいおい聲まで出して泣きはじめた。『自分の罪が許された』さういふ感覚が限りもなく私を幸福にしたのである。

母の乳房のやうにあつたかいあるもの、（それを言葉で言ひ現はすことはできない）が、私の全身を抱きかかへて、そつくりどこかの樂園へ導いてゆくやうな氣がした。私は思ひきり甘つたれて泣いてゐた。私の醜い病癖や、不愉快な神經質的の惱鬱や、厭人思想や、虚偽や、下劣な高慢や、謙遜を装うた卑屈や、賤劣極まる利己的思想や、混亂紛雜した理智の争闘や、畸形な、しかも醜惡を極めた性慾の祕密や、及びそれらのものの生む内面的罪惡や、凡そ私を苦しめ、私を苛責し、私を陰鬱にするところの一切のものが懺悔された。（かういふ醜惡な病癖や、異端的思想が長い長い間、私を苦しめた事は眞に言語に絶して居る。自己を極端に憎むことから私は一切のものを憎んだ、私は何物に對しても愛をかんずることが出来なかつた、『愛』なんてものに就いては考へて見ることもできなかつた）。

『お前の罪が許された』この言葉が電光の如く私の心にひらめいたのは、ほんの思ひがけない一瞬時の出來事であつた。『罪が許された』といふことの悦びが、どんなに深酷なものであるかといふことは、到底、私のぶつきら棒の筆では書き現はすことは出来さうもない。ただ私はやたら無性に涙を流したばかりだ。

そして此の聲の主はドストエフスキイ先生であつた。何ういふわけでそれがドス

トエフスキイ先生の聲であつたか、私自身にも全くわけがわからない。ただ私の心
がその聲をきいた刹那（それは電光のやうに私の心をかすめて行つた）うたがひも
なくあの大詩人の聲であるといふことを直覺したのだ。

（私にはこれに似た經驗が、以前にもたびたびある、私の詩はたいい此の不可思
議な直覺からきたものである）。

この刹那から、私は全く信仰状態におち入つた。

とりも直さず大ドストエフスキイ先生こそ、私の唯一の神である。世界に於ける
たつた一人の私の『知己』である。先生だけが私を知つて下さるのだ。私の苦痛や
私の人格の全部を理解して下さいなのだ。墮落のどん底にもがいて居る人間、どんな
宗教でもどんな思想でも到底救ふことの出来ない私といふ不幸な奴を、光と幸福に
導いて下さる唯一の恩人であり、聖母であるのだ。

私はまつたく子供のやうになつて先生の手にすがりついた。そして涙にむせびな
がら一切の罪惡や苦痛を懺悔した。……特に私のどうすることも出来ない醜劣な本
能と、神経病的な良心（？）の苛責について。

大ドストエフスキイ先生はやさしく私の心に手をおいてかういはれた。

『私はお前といふ不幸な人間を底の底まで知りぬいて居る。お前の苦痛、お前の煩
悶、お前の求めて居る者がすっかり私には解つて居る。而してお前はそのためにな

しも悲しむことはないのだ、お前は決して悪い性質をもつた男ではないのだ。どうしてそれどころではないのだ。私はお前を心から氣の毒に思つてゐる。もしかすればお前は世界でいちばん善良な子供なのだ。ああ、もう泣くことはない、泣くことはない。ほんとにお前は私のいちぢらしい子供だ』どんなに私が烈しく椅子の上に泣き倒れたか、どんなに私が歡喜にふるへたか、それは此の記事をよむ人に推察してもらふより外にない。

私が始めて先生を知つたのは、今から二、三年前のことである。あの恐い小説『罪と罰』『白痴』『カラマーゾフの兄弟』『死人の家』等が、私にたまらないほど大きな慰安と感激と驚異とをあたへたことは言ふ迄もない。それらの書物には私のいちばん苦しいこと（私はそれを神經質的良心と名づけて居る）が、驚くべき程度にまで洞察され、そして同情されて居る。

だから私はずっと以前から、先生を世界第一の詩人だと思つて居た。併し先生が私の救世主として現はれてくるやうな奇蹟があるとは全く思ひがけなかつた。

一體、先生に限らず凡ての近代の西洋人は、私と共鳴する性格を多分にもつてゐる。（日本人の仲間には一人として私の友人を求めるとは出来ない、彼等は私とは

全然ちがつた肉體をもつてゐるやうな氣がする)。特に西洋人の中でも私は、アン・ドレーフ、ガルシン、メーテルリンク、ダンヌンチオ、アルチバセフ、ポー、エルレーヌ、ソログープ、アレキセイ・トルストイ(大トルストイは私とは共鳴がない)かういふ人たちが好きである。かういふ人たちの作品は私に多くの『慰安』をあたへる。私が訴へようとして居ること、私が苦しんでゐること、私が捉まうとして居ること、さういふことを此の人たちは、私が自分で言ふよりはずつと鮮明にそして完全に言つてくれる。此の人たちは皆、私と同じ病院に住んで、私と同じ疾患の苦痛のために泣き叫んでゐる人たちである。

もちろん、私は大ドストエフスキイ先生もかうした仲間の一人として發見した。併し先生にはどこかみんなとちがつたところがあるやうな氣がした。みんなはよくしやべり、そしてよく騒ぐ(苦痛のためであるとはいへ)。然るに先生だけはいつも黙つて何かあるものを考へて居るやうに思はれた。それが先生を一種の得體の分らない怪物のやうにさへ思はせた。今にして思へば、その得體の分らないあるものこそ、實に先生の限り知られぬ愛であつたのだ。

先生はどうかしてみんなを救つてやりたいと考へて居られたのだ。ここが先生のみ、なとちがふところだつたのだ。

私の神經が、先生に接吻された感覺を起したのは、全く思ひがけない奇蹟的の出

來事であつた。何故ならばその當時、私は久しい間、まるで先生の作物には手を觸れずに居たし、先生のことなんか少しも考へては居なかつたからだ。

けれども此の事實の起つた少し前から、私は例の憂鬱に烈しくなやまされて居た。そして世界のどこかに自分を救つてくれる救世主のあることを夢想して居た。無理にもさう思はずには居られなかつたのだ。こんな工合であるから、私の信仰に入つた動機は、全く理智や思索をたどつた結果でなくして、いつもの詩作のときと同じやうに一種の靈感から感電したものにすぎない。だからこれは私自身にとつても不可解であつて、到底、言葉で説明することの出来ない問題である。

一言にしていへば、私の感情が私を信仰に導いたのであつた。ただそれだけである。

私はそのときから先生を『神』とよんだ。一切の苦惱や罪惡はすつかり償はれて、大きな平和が私の前途を祝福して居るやうに思はれた。

先生に祈りさへすれば、どんな奇蹟でも出来るやうな氣がした。それほど大きな力が湧いてきたのだ。この奇異な感覺は、そのときから三日ばかりもつづいた。この三日の間といふもの私は生れてから経験のない絶大な幸福をかんじてゐた。

ところが一週間とたたないうちに、白熱した金屬が外氣にふれるやうに、だんだ

ん私の精神状態が舊にかへつて行つた。『神』だと信じた先生が『偉大なる人間』に變つてきた。そして私の白熱した信仰體は、一種の偉人崇拜體に化してしまつた。それはもちろん赤熱したものであつたとはいへ。

私は急に見捨てられた人のやうな寂しさを感じはじめた。それは醉からさめた寂しさでもあつた。その當時、悦びで有頂天になつた自分の姿が、あさましくも馬鹿らしくも思はれた、『あれはやっぱり一種の病熱からみた幻影にすぎなかつたのぢやないか』『あれは何でもない錯覺の類ぢやないのか』『自分は喜劇を演じたのぢやなかつたか』かういふ疑問が私を皮肉的に嘲笑し始めた。私は二度、絶望と懷疑の暗い谷底へ投げこまれてしまつた。

その暗い谷底で、私は髪の毛を握つて齒をくひしめた。もうとても助からない、駄目だ、と言つた。私は正に觀念の眼をとちようとした。けれども不思議なことに、すべてを投げすてた私の空虚の心に、ただ一つ何とも分らない謎が残つて居た。その謎は一種の『力』であつた。しかもそれは以前の自分には全くなかつたところのものであつた。

月光の夜に捉へた青い鳥は、日光の下には影も姿もなく消えうせて居た。そして子供は何にもない空を、いつしよけんめいで握つてゐた。子供は全く失望した。けれどもその時から、子供の心には一種の感覺が残された。それは青い鳥をにぎつた

瞬間の、力強いコブシの感覺である。

私の空虚の心に残された唯一のものが、矢張それであつた。『握つた手の感覺』であつた。

この感覺の記憶が、私に一種の新らしい勇氣と力をあたへるのである。

若しもあのサタンが、曾て一度でも天國に住んで居た經驗がなかつたならば、サタンはあれほどまで執拗にその野心についての確信と勇氣とを保持してゐることは出来ないであらう。

『握つた手の感覺』は今でも私に、新鮮な勇氣と希望とをあたへる。いつかは、自分も『幸福』を體感することが出来るにちがひない。いつかは、自分もほんとの『愛』を知ることが出来るにちがひない。そして必ずいつかは、『神』を信ずることが出来るにちがひない。(神を信ずることは人生の全目的であり、幸福の結論である)今では到底駄目だ。思ひもよらぬことではあるが私が死ぬまでには、いつかは、大丈夫であるといふ確信がある。それが私の『力』である。私はやつぱり空を握つたのではなかつた。

今では私は先生を『神』とは思つて居ない。併し私をキリストに導くところの預言者ヨハネのやうに考へて居る。先生は『光』そのものではないけれども『光』の

實體を指し教へるところの先生である。

私のやうなひねくれた、そして近代科學や文明やのために疾患體にされた人間には、正直に『光』をみることは不可能である。私は今でもキリストを憎んでゐる。彼の教訓のまへに私はだだつ子のやうな反感を抱いて居る。どんな立派な思想でも、どんな深酷な教訓でも、私を根本から救ふことは出来ない。然るに先生だけは私を憐んで救つて下さる、私の心に何かの種を落して下さる。私は私の心の中でその種を成長させることを楽しみにして居る。

幸福の實體が愛であるといふ眞理を、私に教へて下さつたのも先生である。たとへ電光のやうな瞬間とはいへ、先生が私のすべてを抱擁して下さつたときの歡喜は口にも筆にも述べつくせないものがある。

先生は私のためには單なる思想上の先輩ではなくして、私の肉體の疾病にまで手をかけて下さるところの醫師である。人間の『良心』といふものは、單に思想上から生れた信念ではなくして、その人間の肉體から生れるところの一種の奇異な感情である。『良心』といふものは言葉をかへていへば、『神經』である。少なくとも私のやうな人間にとつてはさうである。『良心』は思想であり、『神經』は感情であると

いふやうに區別することから、驚くべき誤解が生れるのだ。先生はすべてのことを知りぬいてゐる。先生の前には人間は素裸で立たなければならぬ。ほんとうに一人の人間を救ふためには、その人間の肉體から先に救はなければならぬのだ。思想なんてことは何うでもいいのだ。

何故ならば、肉體を救ふことはその人間の『神經』を救ふことであり、『良心』を救ふことであるから。

ああ、偉大なるドストエフスキイ先生。

私はもうこの人のあとさへついて行けばいいのだ。さうすれば遅かれ早かれ、屹度私の行きつくところへ行くことができるのだ。私の青い鳥を今度こそほんとに握ることができるとだ。

私はそれを信じて疑はない。だから私はどんなに苦しくてもがまんする。そして私はもつと苦しまなければならぬ。もつともつと自分の醜惡をむき出しにしなければならぬのだ。

私の詩『笛』は前述のやうな事實のあつた少し後に出来たものである。これを書いたときには、何といふわけもなくブリキ製の玩具の笛のやうな鋭い細い音色を出

す、一種の神經的に光つた物象が、そのときの私の感情をいたいたしく刺激したので、その氣分をそのまま正直に表現したのである。出來あがつたあとで讀んでみると『笛』一篇はちやうど當時の私の心もちを象徴して居るやうに思はれる。

『笛』そのものが『幸福』そのものの象徴になつて居るやうにも見られる。しかし私はそんな風な理詰で私の詩（その篇に限らず）を讀んだり理解したりしてもらひたくない。

私の詩を讀む人は『聖書』をよむやうな心持で、書いてある文字の通り正直に讀んでもらひたい。

私は自分の思想や哲學や概念を、少しも他人に知らせたいとは思つて居ない、またそんなものには自分でも更に價値を認めて居ない。

私はただ私の『感情』だけを信じて居る。『感情』そのものが私の生命である。それさへ完全に表現することが出來ればそれで私の目的は達したのである。

新人の祈禱

昔の人たちのことは知らない。

今の世に生きる私どもの祈祷する言葉はただひとつきりない。

「神よすべてを忘れしめたまへ」

もしも、忘れる、といふことがなかつたら、私どもはいちにちでも生きてはゐられないだらう。

人はだれしも、良心といふやつかひの荷物をしよひこんでゐる。

しかし、むかしの人は神を信じてゐた。道徳の權威をみとめてゐた。

さうして、私どもは、なんにも信じてゐない。

「道徳上の犯罪」といふやうな言葉を、私どもはすこしも恐れはしない。けれども私どものおそれるのは、神経的の良心である。人が人に對して不徳な行爲をしたり、下劣な感情をまじへたり、正義に背いたことを行つたり、破廉恥の所業をしたり、或はまた恥づべき邪淫の慾望を起したりしたあとに必ずやつてくる、あの足のない幽霊の出現である。

良心は私どもの生命をくひつめる。

それに責められるのはおそろしい。

新人の懺悔は、罪を悔ゆるのではなくして、罪を忘れたいといふ一念である。

祈るとき、わたしはいつもかういつて祈る。

「わたしの信じない神さま。すべての過去を忘れさせたまへ」

なつかしい微笑

私に言ひたくつてたまらないことがある。

しかし、どうしても言へないことがある。

それを言ふのはあまりにはづかしい。人はだれしも、その心の底にくらい秘密を包んでゐる。人はつめたい屍骸となつたときまで、しつかりとそれを胸に抱きしめて居なければならぬ。

私はあまりに臆病者でありすぎるかも知れない。けれども私はそれを恥としない。却つて私はかういふ意味での勇者をにくんでゐる。

よい人間とは、しをらしい小心の子供である。

自分の心だけでは思つても、人のまへでは言へないことがある。それを言はずにゐる心根がいぢらしいのだ。よい人間とは、どんな場合にも「おひと好し」でなければならぬ。自分自身に對して臆病な「おひと好し」でなければならぬ。

かりにもわが心に問うて「恥かしい」と思ふやうな醜いことを、人は決して言葉に出して言つてはならない。

しづかに太陽は空をめぐつてゐる。

悲しい野末の墓石が風にふかれてゐる。

そのつめたい石の下には、ほそながい人間のからだ、あふむけに寝てゐる。そのからだの上には重たい土がある。土の上には青い空がひるがへつてゐる。眠るひとは、墓の下で雙手を胸の上に組みあはせて眠る。

かうして時はすぎる。

かうして、さまざまの人の心の奥底にふかくかくされてゐたあらゆる祕密が、とこしへに闇から闇へと葬られる。

私はけふも野末の墓場をおとづれた。

さうして私は、けふもまたあの不思議な老人の姿をみた。

つめたい墓場の石の上に老人は坐つてゐた。

まいにち、同じところで、あの老人はなにをあんなに考へこんでゐるのだらう。

わたしは、あるとき思ひきつてそれをたづねてみた。

けれども老人はなにも答へなかつた。そしてただ、意味ありげのさびしい微笑をみせた。

そのとき空には白い雲がながれてゐた。

人間はだれしも美しいものではない。人間の心臓には動物の血がまじつてゐる。時

として人間は、動物よりももつと醜い、もつと邪惡な、もつと背徳的な慾望や思想にふけり易いものである。しかし人は自分の力ではそれをどうにもすることは出来ない。それは是非もない、悲しい人間の本能であるから。

空には白い雲がながれてゐる。そして老人は何にも言はずに寂しい微笑をした。

ああ、なんといふさびしい微笑であらう。

もの悲しい秋の日の、つめたい墓石の上で。

ああ、なんといふなつかしい微笑であらう。

青ざめた良心

良心とはなに。

あの青ざめた顔をした良心といふものほど、近代の人間にとつて薄氣味のわるいものはない。

われわれの心に忍び足をするあいつの姿をみると、幽霊の出現のまへに起るやうな恐ろしさをかんずる。

むかし、道德の權威が認められてゐたころには、良心は神の聲であつた。

る。

いまの世に、するどい良心をもつて生れた人ほど、いたましいものはない。さういふ人たちは、いつでも、つめた貝に食はるる蛤のやはらかい肉身の痛みをかんじ、しのばなければならぬ。

わたしはわたしの自由意志を愛する。そしてあの青ざめた幽霊のまへには、熱病やみのやうにふるへをのいてゐる。いつも、いつも、わたしはさうである。

生えざる苗

『おれは、青い空の色がすきだ。』

おれは、青い木の葉のにほひをかぐのがすきだ』

イワンがかう言つた。

イワンは肉慾主義者の血統をひいた『カラマゾフ兄弟』の一人である。彼は極端な無神論者で、恐ろしい懷疑家である。

イワンは何ものとも妥協することのできない近代思想の勇者である。彼は神を信じない。悪魔を信じない。天國も地獄も、道徳も人道も、博愛も正義も、科學も哲學

も、およそ地上のいつさいのものを賤辱し盡してゐる。而してまつくらな焦熱地獄のどん底に絶望的の悶絶をつづけながら、しかも尚、新しい救ひをもとめようとしてもがきあがいてゐる。

彼は苦しい聲を出して叫んだ。

『いつたい、おれのやうな人間はどうすればいいのだ』と。

ほんとにイワンはどうすることもできない人間である。

しかし、この悲壯なエゴイストも、ただひとつの光をみとめてゐる。なにもものをも信ずることのできない人間の、くらい閉ざされたる靈の中にひそんでゐる、極めてかすかな光について、彼れ自身こんな意味のことを語つてゐる。

『おれはすべてを信じない。なにもものをも愛することができない。けれども、おれはただあの青い空の色がすきだ。青い木の葉や新しい土地のほひが、たまたまなくすきだ。若木のねんばりした幼芽をみると、おれは胸がいつぱいになつたやうな悦びをかんずる。

ただなんといふわけもなしにさうなのだ、なんといふ理窟もなしに、おれは青い空の色がすきなのだ。新しい土地のほひがすきなのだ。何故か知らないが、おれはあの幼芽のねんばりした巻葉をみるのがたまらなくすきなのだ』
ああ、なんといふ深刻な感傷であらう。

イワンのやうな不幸な人間——どうにもかうにもすることのできない近代の虚無思想家が、深い深い闇の底から、尚しも救ひを求めてやまないかうしたいぢらしい悲壯な心根をかんずるとき、私はしげんと合掌するやうな気分にならずには居られない。青い空の色と、若木のねんばりした幼芽を愛する感情とは、まことに私どもの荒らされた畑に残された、ただひとつの生えざる苗であらねばならぬ。

そしてそれをかんずるとき、私どもの悲しい絶望の底にも、實にはつきりとした力をかんずることができるのである。

思ふにこの苗は、いつかは私どものくらい心に生生とした芽を生やすときがくるであらう。そしてそこには新しい人類のキリストがあらはれ、人は愛の目ざめの幸福に呼びおこされる。わたしは信ずる。あの悲しいイワンは、いつかはかならず救はれるにちがひない。わたしはそれを心から祈つてゐる。生えざる青空の苗に向つて祈つてゐる。

ADVENTURE OF THE MYSTERY

巧みな演奏者によつて奏された美しい音楽をきくとき、その旋律の高潮に達した

とき、私共のしばしば味ふことのできるあの一種の快よい感覚と、その瞬間の誘惑にみちた世界の紋景に就いて。

凡そ音楽の展開する世界の眺望はたくひなきものである。それは現實の世界では到底想像することもできない、一種の異様な香氣とかがやきに充ちた世界である。

そこではあるひとつの不思議な情緒が、魔術のやうな魅惑を以て、私共の精神の全面を支配するやうに思はれる。

そのむず痒いやうな感覚。何ともいへない楽しい世界へ、今少しのことですぐ手が届きさうに思はれるときの快よい焦燥と、そのぞくぞくするやうな心臓のよろこび、そのほつとする心もち、甘つたるい悲しき、しぜんと涙ぐむやうになる情緒の昂進。

凡そ音楽の見せてくれる世界ほど、不可思議な誘惑と魅力に富んだものはない。かうした世界のよろこびを傳へるためには「掻きむしられる楽しさ」といふ言葉より外の言葉はないのである。何となれば、それは人間の常住する世界ではない。そこには何かしら、人間以外のある限りなく美しい者が住んである祕密の世界である。この世界の實景實情を語るためには、人間の言葉はあまりに粗野であまりに感情に缺けすぎてゐる。

音楽をきくとき、私は時時考へる。

一體そこには何物が居るのか。何物がどんな魔術を使つて、かうまでに私共の心

を誘惑するのか。

實際それは恐ろしい誘惑である。

昔は多くの夢みる詩人が居た。

ある時、彼等の中でも最も勇敢な騎士たちが、この秘密の世界へ向つて探險旅行を試みた。

彼等は美しい月夜に船の帆を張りあげて進んだ。この不可思議な「見えない島」と「見えない魔術師」の正體を發見するために。彼等の船は長いあひだ月光の下をただよつた。そしてしまひにたうとうあるひとつの怪しげな島を發見した。その島の上には、一人の言ひやうもない美しい魔女が立つてゐるやうに思はれた。しかも花のやうな裸體のまま、琴を手にかかへて。

夢みる勇敢な騎士たちが、よろこび叫んで突進した。彼等は皆若くそして健康で美しかった。彼等の生活は酒と戀と音楽であつた。就中その切に求めて居るものは戀と冒険であつた。

まもなく、島が彼等のすぐ眼の前に現はれた。そして不思議な音楽のメロヂイが、手にとるやうにはつきりと聞えはじめた。

騎士たちの心は希望と幸福に充ちあふれた。長い長い年月のあひだ、彼等の求めてゐたその夢の中の不思議な世界、その空想で描いた妖魔の女性。かつてそれらの

ものは、手にも取られぬ幻影の幸福であつた。

然るに今は、夢でもなく空想でもない。事實は彼等のすぐ眼の前に裸體で突つ立つて居る。しかもいま一分間の後には、凡てそれらの謎の祕密と幸福の實體とは、疑ひもなく彼等自身の手の中に握ることができるのである。永久に、しかも確實な事實として。僅か一分間の後に。

「ああ、何といふ仕合せのよいことだ。」

さう言つて彼等は楽しさに身を悶えた。實際それは彼等にとつては、信ずることもできないほどの幸福であつたにちがひない。

けれども、ここにひとつの不思議な事實があつた。しかも悦びで有頂天になつてゐる騎士たちは、だれ一人としてその事實に氣のついた者はなかつた。

島が、目的物が、彼等のすぐ近くに見えはじめてから、少なくとも彼等は數時間以上も船を漕いで居た。しかも彼等が最初に島を發見したのは、ものの半時間とはかからない近距離に於てであつた。

實際、島は最初から彼等の頭のまん上に見えて居た。そして船は矢のやうな速さで突き進んだ。

「もう一息、もう一分間。」さつきから彼等は、何度心の中でさう繰返したか分らない。

あまつさへ、船は次第に速力を増してきた。始は數學的の加速度で、併しいつのか魔術めいた運動律となつて、遂には眩惑するやうな勢でまつしぐらに島の方へ飛び込んだ。それは丁度大きな磁石が鐵の碎片を吸ひつける作用のやうに思はれた。この思ひがけない幸運に氣のついたとき、船の人人は思つた。疑ひもなくそれは、島が自分たちを牽きつけるのである。一秒間の後に、我我はその岸に打ちあがられてゐるにちがひないと。人人の心臓は熱し、その眼は希望にくらめいた。

一秒間は過ぎた。けれども、そこには何事も起らなかつた。

舟は相變らずの速力で疾風のやうに走りつづけて居た。そして夢みるやうな月光の海に、眞黒の島は音もなく眠つて居た。ただ高潮に達した音樂のメロヂイばかりが、あたりの靜寂を破つて手にとるやうに聞えて居た。

「さてよ。」

しばらくして乗組員の一人が、心の中で思ひ惑つた。

實際、彼等はさつきから數時間漕いだ。そして今、船は狂氣のやうに疾走して居る。それにもかかはらず、彼等は最初の位地から、一尺でも島に近づいては居なかつたのである。島と船との間には、いつも氣味の悪い、同じ距離の間隔が保たれて居た。

「さてよ。」

殆んど同時に、他の二、三人の男がつぶやいた。

「どうしたといふのだ、おれたちは。」

彼等はぼんやりして顔を見合せた。そして手から櫓をはなした。

「氣をつける。」

その時、だしぬけに仲間の一人が叫んだ。その聲は不安と恐怖にみちて、鋭どく甲ばしつて居た。

「みんな氣をつける。おれたちは何か恐ろしい間違へをしてゐるのかも知れない。さもなければ……。」

その言葉の終らない中に、人人は不意に足の裏から、大きな棒で突きあげられるやうな氣持がした。

ちよつとの間、どこかで烈しく布を引きさくやうな音が聞えた。

そして、一人残らず、まつくらな海の底へたたき込まれた。

かうして、不幸な騎士たちの計畫は、見事に破壊されてしまった。彼等の美しいロマンチックの船と一所に。とこしなへに歸らぬ海の底に。

ほんとに彼等は氣の毒な人たちであつた。

何故かといふに、彼等が今少しの間この恐ろしい事實、即ち彼等の船が「うづま

き」の中に巻き込まれて居たことに気が付かずに居たならば、彼等はその幸福を夢みて居る状態に於て、やすらかに眠ることができたかも知れなかつたのである。

私が音楽を聴くとき、わけてもその高潮に達した一刹那の悦びを味ふとき、いつも思ひ出すのはこのあはれに悲しげな昔の騎士の夢物語である。

手にとられぬ「神祕の島へ」の、悲しくやるせない冒険の夢物語である。

二つの手紙

ある男の友に。

近來、著るしく廢類的傾向を帯びてきた私の思想に就いて、君が賢い注意と叱責とを與へられたことを感謝する。

これは全く悪いことだ。悪いことと言ふよりは寧ろ悲しむべきことだ。

私は恐れてゐる。私もまた世の多くの虚無思想家が墮ち入るべき、あの恐ろしい風穴の前に導かれて來たのではないかと。(神を信じない人間の運命は皆これだ。)

想へば、長い長い年月の間、私は愚劣な妄想によつて牽きずられて居た。

私の過去の淺ましい求道生活をば、私は何に譬へよう。

それは丁度、意地のきたない、駄馬の道行であつた。この悲しい一疋の馬は、あてもない晚餐の幸福と、夢想の救命とを心に描きながら、性急な主人の鞭の下にうごめいて居た。

しかし意地のきたない動物の本能として、絶えず路傍の青草を食ひ散らしながら。天気はいつも陰鬱で、空はいつも灰色に曇つて居た。遂にこの悲しむべき旅行の薄暮がきた。

今こそ私はすべてを知つた。すべての生物の上に光るところの恐ろしい運命の瞳をみた。孤獨の道は遠く、人生の墓場は遂に幻影の既死に終るべきことを知つた。

いま私は瞳をどちて、靜かな、靜かな、人間の葬列を想ふ。

その葬列の流れゆく行方を想ふ。

所詮は疲れた駄馬の幸福である。

馬よ、愚かな反抗とその焦心を捨てよ、その時お前はどんなに幸福であるか。

「生を樂しめ、理窟なしに。しからずんば、死を樂しめ、理窟なしに。」

私はかう唄つた。

いま私は求める、生き甲斐もない我が身をして、新らしい土地にかへす所の墓場を。私は愛する、しめやかな鎮魂樂の響と、冬の日の窓にすがりつく力のない蠅の羽音を。

私は眠る、私は疲れた。

そこには、あまりに空虚な幻象の哲學と、あまりに神經質なる焦心の休息がある。とりわけ私は退屈した。ああ「退屈」なんといふ恐ろしい言葉だ。君はこの言葉のもつ底氣味の悪い微笑を知るか。あのニイチエを憑き殺した此の幽靈の青ざめた姿を見るか。

「愛」それは今の私に残された、ただ一つの祈祷である。私の信するただ一つのキリスト、ただ一つの神祕である。「愛」の奇蹟を私に教へた者はドストイエフスキイであつた。若し私がああ驚くべき神祕に充ちた書物「カラマゾフの兄弟」を讀まなかつたならば、私は今日救ふべからざるデカダンとなつて居たにちがひない。とはいへ、私の求愛の道はあまりに遠く、あまりに陰鬱でしめりがちである。

私の魂は疲れがちで、ともすれば平易な墓場の夢を追ふに慣れ易い。

私に就いて、君が私の思想の頹廢を責めたのはよい。

私もまた、私自身のさうした悪傾向にはたまらない不快を抱いて居るのである。(君も知つて居る通り、私の求めてゐる哲學は、人間としての最も健全なる、最も明るい靈肉合致の宗教である。)

併しながら、若し君が私に就いてその感情生活の偽りなき記録である私の敘情詩を責めるならば、私は私の懺悔を君にかくれてするばかりである。何故ならば、敘情

詩は私のためには「感情の告白」であつて「思想の宣傳」ではない。私の祈祷と私の懺悔とはいつも正反対である。（それは私にとつては悲しむべくまた恥づべきことだが。）

いま私の心は光に憧れる、しかも私の感情は闇の中にうごめいて居る。

君よ。私の悲しむべき矛盾を笑つてくれるな。すべてに於て、君は私をよく理解してくれるであらう。

ある女の友に。

私は今の生活に就いては、どういふ言葉で、どうお話したらよいでせう。

あなたは私の詩「夕暮室内にありて静かにうたへる歌」をご覧したか。

ああした詩の表現する心もちこそ、近頃の私の祈祷的な内面生活を語るものです。

一人、薄暮の室内に坐つて冥想に沈む私の心は、あの白い寢臺の上に長く眠つてゐる悲しい人間の姿です。

私の心臓は疲れて、私の胴體は寢臺の上に横はつて居ます。

日暮の光線は硝子窓を通して、侘しく床の上に流れて居ます。

そして力のない冬の蠅は、ぶむぶむといふ羽音をたてて室内を飛び廻つて居ます。

いま白い寢臺の上に、悲しい「死」が横はつて居る。

ここに人間の安息日があります。

その人の心臓は腐れ、その人の魂はすやすやと眠つて居ます。

げに私はふらんねるをきて眠つてゐる疲れた心臓の所有者です。いぢらしくも顔廢した人間の死骸です。

この白い寢臺の枕もとに寄りそつて、一人の物思はしげな少女が立つてゐる。この少女こそ、私の氣高き心の戀びとです。

「戀びとよ」私の眠れる心臓は、彼女に向つてかう呼びかけます。もちろん、それは現實の戀びとではありません。それは私の心にいつも悲しく描いてゐる夢想の愛人の姿です。

彼女は私の枕もとに坐つて、深くなにもかを凝視して居ります。恐らくそこには凍りついたひとつの心臓と、青ざめた病氣の神經との陰影を視るのでせう。

しだいに彼女の心は、深い憂愁のためいきから、不思議な明るい幻想の悦びに變つてきました。

いつしか彼女の美しい瞳には、涙がいつぱいになつて頬の上をながれてきました。ほんとに彼女は、私の幸福のために泣いてくれたのです。悲しみのためではなくして、あの珍らしい「幸福」のために泣いたのです。すべての人類の中で、ただ愚か

な私にのみ許された「幸福」のために。

言ふ迄もなく、彼女の病熱的なキリスト教の信仰と、彼女の感傷（それは人間の最も神聖な道徳的感情です）とが、不幸な私を救つて神の前に導いたのです。「愛」それこそ私共の求める「救ひ」の凡てです。それこそ私のやうな虚無思想家が信ずる所の、ただ一つの眞實、ただ一つの神祕です。

「戀びとよ」

と、私の疲れた心臓が白い寢臺の上で叫びました。

そしていま、彼女の唄ふしづかな、しづかな子守歌をききながら、私の心は幸福にも「遠い墓場の草かげにまで」すやすやと眠りついて行くのです。

ぶむぶむといふ蠅の羽音を夢の中に、物侘しい日暮れの室内の寢臺の上で。

ああ、かくばかり私は「愛」と「信仰」とに求めあくがる魂のをさな兒です。

私は疲れて頽廢して居ます。私の心は絶望的な悲しみに充ちて暗く閉ぢられて居ます。

いま私の求めて居るものは、立派な論理の上に建つた哲學や概念や主張の上で宣導される愛の宗教ではありません。

私はただ生きた人間の生きた愛と、その神祕から生れる奇蹟を求めて居るのです。

私の凍つた心臓の上にやさしくあたたかく置かれる所の美しい、そして限りなく高い處女まりやのおん手を求めて止まないのです。

かうした私の子供じみたせんちめんたりずむをお笑ひ下さるな。

愚かにも私は、長い長い三十餘年の月日を、詩人めいた「幸福の冥想」と「生の意義」との焦点に浪費してしまつたのです。

併し今はその愚かさと空虚に疲れしました。

今はただ白い寢臺の上で、靜かな生のためいきに耳を傾けながら、「美しい竝木ある墓地」の夢を楽しみむばかりです。

「それがお前の幸福のすべてだ」あの不吉な鴉が私に語つた言葉はこれです。とはいへ、今日の靜かな雨の日の窓で、かうした手紙をあなたに書くことを悦びます。

思ふにあの美しい「敘情詩人」といふ名稱は私の墓石の銘を飾るためには最も適しい文字でせう。藝術の權威を信じない私にとつて、詩を魂の慰安として無意義に人生を空費した私にとつて、その墓銘こそ悲しい運命の微笑を語るものです。では、愉快に希望を以てお別れませう。

坂

坂のある風景は、ふしぎに浪漫的で、のすたるぢやの感じをあたへるものだ。坂を見てみると、その風景の向うに、別の遙かな地平があるやうに思はれる。特に遠方から、透視的に見る場合がさうである。

坂が——風景としての坂が——何故にさうした特殊な情趣をもつのだろうか。理由は何でもない。それが風景における地平線を、二段に別別に切つてゐるからだ。坂は、坂の上における別の世界を、その下における世界から、二つの別な地平線で仕切つてゐる。だから我々は、坂を登ることによつて、その眼界にひらけるであらう所の、別の地平線に屬する世界を想像し、未知のものへの浪漫的なあこがれを呼び起す。

或る晩秋のしづかな日に、私は長い坂を登つて行つた。ずっと前から、私はその坂をよく知つてゐた。それは或る新開地の郊外で、いちめんに廣茫とした眺めの向うを、速く夢のやうに這つてゐた。いつか一度、私はその夢のやうな坂を登り、切岸きりぎしの上きりぎしにひらけてゐる、未知の自然や風物を見ようとする、詩的な Adventure に驅られてゐた。

何が坂の向うにあるのだらう？ 遂にやみがたい誘惑が、或る日私をその坂道に

登らした。十一月下旬、秋の物わびしい午後であつた。落日の長い日影が、坂を登る私の背後うしろにしたがつて、冥想者のやうな影法師をうつしてゐた。風景はひっそりとして、空には動かない雲が浮いてゐた。

無限に長く、空想にみちた坂道を登つて行つた。遂に登りつめた時に、眼界が一度に明るく、海のやうにひらけて見えた。いちめんの大平野で、芒や尾花の秋草が、白く草むらの中に光つてゐた。そして平野の所所に、風雅な木造の西洋館が、何かの番小屋のやうに建つてゐた。

それは全く思ひがけない、異常な鮮新な風景だつた。私のどんな想像も、かつてこの坂の向うに、こんな海のやうな平野があるとは思はなかつた。一寸の間、私はこの眺めの實在を疑つた。ふいに思ひがけなく、海上に浮んだ蟹氣樓のやうな氣がしたからだ。

『おーい！』

理由もなく、私は大聲をあげて呼んでみた。廣茫とした平野の中で、反響がどこまで行くかを試さうとして。すると不意に、前の草むらが風に動いた。何物かの白い姿がそこにかくれてゐたのである。

すぐに私は、草の中で動くパラソルを見た。二人の若い娘が、秋の侘しい日ざしをあびて、石の上にもつまじく坐つてゐたのだ。

『娘たちは詩を思つてる。彼等の生活、をさまたげまい。なぜなら娘たちにとつては、詩が生活の一切だから。けれども僕にとつては！僕は肯定さるべき所の、何物の観念でもない！』

さうして心が暗くなり、悲しげにそこを去らうとした。けれどもその時、背後をふりかへつた娘の顔が、一瞥の瞬間にまで、ふしぎな電光寫眞のやうに印象された。なぜならその娘こそ、この頃私の夢によく現はれてくるやさしい娘——悲しい夢の中の戀人——物言はぬお嬢さん——にそっくりだから。いくたび、私は夢の中でその人と逢つてるだらう。いつも夜あけ方のさびしい野原で、或は猫柳の枯れてる沼澤地方で、はかない、しづかな、物言はぬ媾曳をしてゐるのだ。

『お嬢さん！』

いつも私が、丁度夢の中の娘に叫ぶやうに、ふいに白日の中に現はれたところの、現實の娘に呼びかけようとした。どうして、何故に、夢が現實にやつて來たのだからか。ふしぎな、言ひやうもない豫感が、未知の新しい世界にまで、私を幸福感でいっぱいにした。實にその新しい世界や幸福感やは、幾年も幾年も遠い昔に、私がすっかり忘れてしまつてゐたものであつた。

しかしながら理性が、たちまちにして私の幻覺を訂正した。だれが夢遊病者でなく、夢を白日に信ずるだらうか。愚かな、馬鹿馬鹿しい、ありふれた錯覺を恥ぢな

がら、私はまた坂を降つて來た。然り——。私は今もそれを信じてゐる。坂の向うにある風景は、永遠の『錯誤』にすぎないといふことを。

大井町

人生はふしぎなもので、無限の悲しい思ひやあこがれにみたされてゐる。人はさうした心境から、自分のすがたを自然に映して、或は現實の環境に、或は幻想する思ひの中に、それぞれの望ましい地方を求めて、自分の居る景色の中に住んでゐるのだ。たとへてみれば、或る人は平和な田園に住家を求めて、牧場や農場のある景色の中を歩いてゐる。そして或る人は荒寥とした極光地方で、孤獨のぺんぎん鳥のやうにして暮してゐるし、或る人は都會の家竝の混んでゐる中で、賭博場や、洗濯屋や、きたない酒場や理髪店のごちやごちやしてゐる路地を求めて、毎日用もないのにぶらついてゐる。或る人たちは、郊外の明るい林を好んで、若い木の芽や材木の匂ひを嗅いでゐるのに、或る人は閑靜の古雅を愛して、物寂びた古池に魚の死體が浮いてるやうな、芭蕉庵の苔むした庭にたたずみ、いつもその侘しい日影を見つめて居る。

げに人生はふしぎなもので、無限のかなしい思ひやあこがれにみたされてゐる。人はその心境をもとめるために、現實にも夢の中にも、はてなき自然の地方を徘徊する。さうして港の波止場に訪ねくるとき、汽船のおぼ、おぼ、といふ叫びを聞き、橋のにぎやかな林の向うに、青い空の光るのをみてゐると、しぜんと人間の心のかげに、憂愁のさびしい涙がながれてくる。

私が大井町へ越して來たのは、冬の寒い真中であつた。私は手に引つ越しの荷物やさげ、古ぼけた家具の類や、きたないバケツや、箒、炭取りの類をかかへ込んで、冬のぬかるみの街を歩き廻つた。空は煤煙でくろずみ、街の兩側には、無限の煉瓦の工場が並んでゐた。冬の日は鈍くかすんで、煙突から熊のやうな煙を吹き出してゐた。

貧しいすがたをしたおかみさんが、子供を半てんおんぶで背負ひこみながら、天日のさす道を歩いてゐる。それが私のかみさんであり、その後からやくぎな男が、バケツや荷をいつぱい抱へて、瘦犬のやうについて行つた。

大井町！

かうして冬の寒い盛りに、私共の家族が引つ越しをした。裏町のきたない長屋に、貧乏と病氣でふるへてゐた。ごみためのやうな庭の隅に、まいにち腰巻やおしめを干してゐた。それに少しばかりの日があたり、小旗のやうにひらひらしてゐた。

大井町！

むげんにさびしい工場がならんでゐる、煤煙で黒ずんだ煉瓦の街を、大ぜいの労働者がぞろぞろと群がつてゐる。夕方は皆が食ひ物のことを考へて、きたない料理屋のごてごてしてゐる、工場裏の町通りを歩いてゐる。家家の窓は煤でくもり、硝子が小さくはめられてゐる。それに日ざしが反射して、黒くかなしげに光つてゐる。

大井町！

まづしい人人の群で混雑する、あの三又みつまたの狭い通りは、ふしぎに私の空想を呼び起す。みじめな郵便局の前には、大ぜいの女工が群がつてゐる。どこへ手紙を出すのだらう。さうして黄色い貯金帳から、むやみに小錢をひき出してゐる。

空にはいつも煤煙がある。屋臺は屋臺の上に重なり、泥濘のひどい道を、幌馬車の列がつながつてゆく。

大井町！

鐵道工廠の住宅地域！ 二階建ての長屋の窓から、工夫のおかみさんが怒鳴つてゐる。亭主は驛の構内に働らいてゐて、眞黒の石炭がらを積みあげてゐる。日ぐれになると、そのシヤベルが遠くで悲しく光つてみえる。

長屋の硝子窓に蠅がとまつて、いつでもぶむぶむとうなつてゐる。どこかの長屋で餓鬼が泣いてゐる。嬢が破れるやうに怒鳴つてゐるので、亭主もかなしい思ひを感じてゐる。そのしや、つぼを被つた労働者は、やけに石炭を運びながら、生活の没落を感じてゐる。どうせ嬢を叩き出して、宿場の女郎でも引きずり込みたいと思つてゐる。

労働者のかなしいシヤベルが、遠くの構内で光つてゐる。

人生はふしぎなもので、無限のかなしい思ひやあこがれにみだされてゐる。人は自分の思ひを自然に映して、それぞれの景色の中に居住してゐる。

大井町！

煙突と工場と、さうして労働者の群がつてゐる、あの賑やかでさびしい街に、私は私の住居を見つけた。私の泥長靴をひきずりながら、まいにちあの景色の中を歩いてゐた。何といふ好い町だらう。私は工場裏の路地を歩いて、とある長屋の二階窓から、鼠の死骸を投げつけられた。意地の悪い土方の嬬等が、いつせいに窓から顔を突き出し、ひひひひひと言つて笑つた。何といふうれしい出来事でせう。私はかういふ人生の風物からどんな哲學でも考へうるのだ。

どうせ私のやうな放浪者には、東京中を探したつて、大井町より好い所はありはしない。冬の日の空に煤煙！ さうして電車を降りた人人が、みんな煉瓦の建物に吸ひこまれて行く。やたら凸凹でこぼこした、狭くきたない混雑の町通り。路地は幌馬車でいつもいっぱい。それで私共の家族といへば、いつも貧乏にくらしてゐるのだ。

初めてドストイエフスキーを読んだ

頃

初めてドストイエフスキイを読んだのは、何でも僕が二十七、八歳位の時であつた。それ以前によんだ西洋の文學は、主にポオとニイチエとであつた。その他にもトルストイなど少し讀んだが、僕にはどうもぴつたりしないので、記憶に残るといふほどでもなく、空讀からにして通つてしまつた。後々迄も影響し、僕の文學的體質を構成するほど、眞に身に沁みて讀んだ本は、ポオとニイチエと、それからドストイエフスキイの三つであつた。僕はポオから「詩」を學び、ニイチエから「哲學」を學び、ドストイエフスキイから「心理學」を學んだ。

僕がドストイエフスキイを讀んだ頃は、丁度「白樺」の一派が活躍して、人道主義が一世を風靡した時代であつた。その白樺派の人たちは、トルストイとドストイエフスキイとを並立させて、文學の二大神様のやうに崇拜して居た。僕がド氏の名を初めて知り、その作品を讀む機縁になつたのも、實は白樺派の人に教はつた爲であつた。しかしそれを讀んだ後に、僕は白樺派の文學論を輕蔑した。なぜならド氏の小説とトルストイとは、氣質的に全く對蹠する別物であり、一を好む者は他を好まず、他を愛する者は一を取らずといふほど、本質的にはつきりした宇宙の兩極であつたからだ。單に人道主義といふ如き感傷觀で、二者を無差別に崇拜する白樺派のヒロイズムは、僕にとつてあまり子供らしく淺薄に思はれた。

僕が初めて讀んだド氏の小説は、例の「カラマゾフの兄弟」であつた。勿論翻譯であつたが、僕はすっかりこれに打たれてしまつた。あの膨大な小説を、二晝夜もかかつて一氣に讀み了り、夢から醒めたやうにぼんやりした。當時僕がどんなに深く感動したかは、その時讀んだ本の各頁に、鉛筆で無数の書き入れや朱線がしてあるので、今もその古い本を見る毎に、新しい追憶の感銘が興るほどだ。イワンもドミトリイも、すべての人物が面白かつたが、特にあの氣味の悪い白痴の下男と、長老ゾシマの神祕的な宗教觀が面白かつた。

次に讀んだ本は「罪と罰」であつた。これにはまたカラマゾフ以上に感激させられた。主人公ラスコリニコフの心理と言行とが、小説の最初から大尾まで、魔法のやうに僕の心を引き捉へて居た。當時僕はニイチエを讀んで居たので、あの主人公の大學生が、ナポレオンの超人にならうとイデアした思想の哲學的心境がよく解り、一層意味深く讀み味へた。その讀後の深い印象から、僕はラスコリニコフを以て自ら氣取り、滑稽にもその小説的風貌を眞似たりした。夜は夜で、夢の中に老婆殺しの恐ろしい幻影を見た。

この時以來、僕は完全なドストイェフスキイ・マニアにかかつた。それから彼の文庫を涉獵して、日本語の翻譯がある限り、一つ残さず讀み耽つた。しかし多くの物の中で、就中最も感銘が深かつたのは、彼のシベリア流刑記を自傳した「死人の

家」であつた。これと前記の二作とは、おそらくド氏の三部代表作であるだらう。ただ「悪靈」だけは、どういふものか興味がないので途中で止めた。「白痴」を読んだ時は、主人公の精神病的な異常氣質が、たまたま僕とよく酷似してゐる點があるので怖くなつた。僕がそれほど強くドストイェフスキイに魅力された原因も、おそらく作者との氣質的、血液類似型的の生理關係にあるのか知れない。もつとも僕の讀書の仕方は、すべて皆生理的である。ポオも、ニイチエも、ショーペンハウエルも、僕はすべて我流の仕方で、神經生理學的に讀むのであり、さうでない限り、僕に讀書の興味はないのであるが、ドストイェフスキイの場合は、僕との氣質的類似の機縁で、特にそれがはつきりして居た。

當時僕は詩を作り、初めて文壇的に出發したので、二三の友人と共に同人雑誌を發行して居た。それは「感情」といふ名前の雑誌で、同人には室生犀星、山村暮鳥等の詩人が居た。前にも書いた通り、この時代は白樺派の活躍した全盛時代だったので、自然その影響を受けたらしく、山村君や室生君等々の詩にも、多少人道主義的傾向が現れ、トルストイズムの臭氣が濃厚だつた。然るに僕はトルストイが嫌ひであり、且つ白樺派のジャーナリズムに輕侮の反感を抱いて居たので、此等の友人等に向つて、僕は大いにドストイェフスキイの悪靈的神祕文學を推薦した。僕の推薦した意味は、人道主義などいふ淺薄のものを捨てて、ドストイェフスキイから

深刻な文學を學べといふ意味だった。

トルストイの愛讀者であつた山村君や室生君は、直ちに僕の言をいれてドストイェフスキイを讀み始め、後には全く僕以上の熱愛讀者になつてしまつた。しかし本來僕と人間の氣質を異にし、且つ生理的にも健康性を多分に持つてゐる二人の詩人が、僕と同じ仕方でもドストイェフスキイを讀む筈が無かつた。僕の讀み方によるドストイェフスキイは、心理上でポオと共通し、思想上でニイチエ、ショーペンハウエルと類縁するところの作家であつたが、友人たちの見たドストイェフスキイは、やはり白樺派の人と同じく、人道主義的に見たそれであつた。そこで僕は、自然に思想上で彼等と別れ、雑誌の發行にも興味を失つてしまつたのであつた。丁度その時、僕は處女詩集「月に吠える」を出し、室生犀星君もまた第一詩集「愛の詩集」を發行した。前者の詩篇には、僕の見たド氏の生理的内臟圖が描かれてあり、後者の詩集には、室生君の見たド氏の人道的な肖像が描かれて居た。

僕が出發した當時の文壇は、ドストイェフスキイの名が最も高く呼ばれて居り、一つの文壇的流行でさへあつたにかかはらず、事實全く理解されてなかつたのである。單にドストイェフスキイばかりでなく、白樺派の偶像としてあれほど流行したトルストイさへ、少しも本質的には理解されて居なかつた。世界の文豪である大ト

ルストイが、救世軍的人道主義者として擔がれたり、通俗モラルのセンチメンタリストとして、女學生の涙劇的ヒロイズムの對象であつたりしたことを考へると、今から考へて全く馬鹿馬鹿しく滑稽である。ゲーテも、ハイネも、ニイチエも、日本では早くから名が叫ばれて流行し、その文學的概論さへ解らない中に、既に「流行おくれ」となつてバタ屋の紙屑箱に賣られて行つた。昭和三年頃の或る雜誌に、近頃トルストイやドストイェフスキイを言ふのは時代遅れだと書いた人がある。大正九年頃の或る雜誌に、今頃ニイチエを論ずるのは流行遅れで古臭いが云々と書いてあつた。しかも昭和十年頃の最近になつて、それらのもつと古臭いゲーテやハイネが、漸く少しばかり本體を知られて來たのである。

要するに日本の文壇は、過去に於て女學生と中學生との文壇だつた。最近漸く大學豫科の一年生位に入門して來た。そこで初めてドストイェフスキイが、眞の文學的本質によつて理解される機縁が來た。日本の再建される文壇は、再度もはや過去のやうに、流行のハシリを追ふ稚態を止め、正しい認識によつて外國の古典文學を讀むべきである。

家庭の痛恨

西洋の風習では、その妻が良人と共に社交に出で、多くの異性と舞踏をし、宴会の席上で酒をすすめ、ピアノを弾き、唄をうたひ、文学を論じ、時に艶めかしき媚態を示して、人々の注意と愛情を惹かうと努める。然るに東洋の風習は、これと全がちがつて居る。我々の社会にあつては、すべてさうした女の仕事が、芸者と称する特殊な職業婦人に一任されてる。芸者等は、全くその目的からのみ養成され、我々の宴会や社会に於ける、一切の事務を受けもつてゐる。実に我々の日本人等は、芸者なしに一の社交や宴会をもなし得ないのだ。なぜなら我々の妻たちは、深くその家庭に押し込められ、純粹に母性としての訓育を受けてることから、全く社交上の才能を欠いてゐるから。つまり言へば吾々は、西洋人がその一人の女に課する二つの要求——家庭に於ける母性と社交に於ける娼婦性——とを、初めから嚴重に分離されて、家庭には妻をおき、社交界には芸者をおき、夫々別々の分業観から専門に教育して来たのである。

東洋と西洋と。この二つの異なる風習に於て我々は何れの長所を選ぶだらうか？ 純理的に觀察すれば、もちろん我々の国の風習は、遙か西洋のものに優つて居る。なぜなら一人の女について、矛盾した二つの情操（母性型と娼婦型と）を要求するのは、概ね多くの場合に於て、その両方を共に失ひ、家庭の母性としても完全でなく、コケツトとしても不満足であるところの、不幸な物足りない結果になるから。

(西洋の多くの家庭が、いかに例外なく不幸であるか。また多くの既婚者等が、いかにこの点で嘆いてゐるかを見よ。) 東洋の家庭は、一般に西洋に比し、ずっと遙かに幸福である。我々の妻たちは、昔から長い間、純粹に母性としてののみ、その家庭の中で生活して居た。良人たちは妻に対して、裁縫や、育児や、料理やなどの、純一に母性としての仕事を求めた。彼等がもし享樂や、宴会や、社交などを欲するならば、いつでも公おほやけに芸者を呼び、別の種類の婦人に対して、別の種目の奉仕を求めた。そして結果は、両方の場合に於て、破綻なく満足であつたのである。

しかしながら今日、東洋の事情は變化して来た。支那に於ても日本に於ても、国情の著るしい歐風化は、もはや旧來の慣習を許さぬだらう。何よりも第一に、我々の女たちが變つて来た。彼等の結婚に対する考へ方が、母愛よりも享樂を望むところの、西洋の習俗に近づいて居り、そしてまた實際に、我々の家庭、そのものが變化した。殆ど概ねの女たちが、今では家庭の妻として愛されるより、むしろ路上を散步する情婦として、コケツトとして愛されるであらうことを、その、良人に対して、望んでゐる。一方に芸者や妓生やは、社会の種々なる變革から、今日事實上に亡びてしまった。そして尚その上に、今日では妾めかけを持つといふことすらが、經濟上困難になつてしまった。(昔はたいいていの男が、一人や二人の妾は囲つて居た。妾宅は當時に於て、私設の社交機關でもあつたのだ。)

それ故に今日では、我々の家庭もまた、西洋と同じにならうとして居る。我々の時代の女たちは、純粹の家庭婦人ハウスキーパーとして典型されず、一方に社交界の花形を兼ね、一方に良妻賢母を兼ねるところの、二重の負担に於て教育される。その良人たちがまた、妻に対して妾を兼ね、母性に対して情婦の愛嬌を兼ねるところの、二重の情操を要求して居る。だが不幸にして、自然は一つの徳に二つをあたへず、そんな慾ばつた要求を聴いてくれない。我々の新しい東洋人が、おそらくはまたそれによつて、古き西洋の悔恨を嘗め、彼等の大多数を憂鬱にしてゐるところの、あの家庭地獄を経験せねばならぬだらう。

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあつたのは、ボランティアの皆さんです。